碧の軌跡～つながる姉妹の絆～

魔王VSデビル涼月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
碧の軌跡～つながる姉妹の絆～

【Ｎコード】
Ｎ６５３０Ｘ

【作者名】
魔王ＶＳデビル涼月

【あらすじ】
「私の姉は輝いてる・・・だからかな、私みたいな汚れた存在があの人の傍にいちゃいけないんだ。」
これは、イリアの義理の妹が主人公のオリ主もの小説です。
駄文ですがその辺は気にせず読んでいただけるとうれしいです。
オリ主や原作崩壊が嫌という人は回れ右です（笑）

プロローグ（前書き）

オリ主のクラフト技は何にしよう・w・

プロローグ

？？？　ｓｉｄｅ

「はぁ～……」

夜空を見上げ溜息を吐く1人の女性がいた。
アルカンシェルのメインヒロイン、イリア・プラティエである。

「あれからもう8年…あの子は元気にしてるのかしら。」

イリアは懐から1枚の写真を取り出して当時を思い出すように見る。

「昔はよくセシルと一緒に3人で遊んだっけ。
そういえば一緒にお風呂に入ったこともあったわね、あの子ったら顔すごく赤くして…ふふふ、本当にあの頃は楽しかったわ。」

昔を懐かしむその顔は、普段リーシャをからかって楽しむ顔とは別の愛おしい誰かを思う優しさに満ちた顔をしていた。しかし、その顔はすぐに後悔の色に変わる。

「もうあの頃にはもどれないのかしら…」

あの時、自分がもっとあの子を見ていればこんなことにはならなかったのだと過去を後悔するように呟く。

「いつか…またいつか会えるわよねきっと……リリス……」

その小さな囁きは誰の耳にも届かずただ夜の闇に溶けていく。

???　side　end

リリス　side

ワタシヲ　ミツケテ

眩しい…もう朝ですか。

なにか夢の中で女の子の声が聞こえた気がしますね、気のせいでしょうか。

「う〜〜ん」

なぜ朝はこうやって伸びをすると気持ちいいのでしょうか…
たまらなくどうでもいいですね。

考えてみれば私が姉さんの傍を離れて８年…長いようで短いように感じてしまいますね。姉さんは元気にしているのでしょうか……いえ。

「私に姉さんの心配をする資格はありませんね、私があの人の元から勝手に消えてしまったのですから…。」

そうだ、私にあの人の心配をする資格はない。あの誰をも魅了し笑顔にする太陽のような姉の傍に私みたいな汚れた存在がいていいはずがない。

「さてと、そろそろ起きましょう。電車に間に合わなくなってしまいそうですから。」

では行きましょうか、

……光と闇の混在する都市、クロスベルへ。

リリス side end

プロローグ（後書き）

小説ってむずかしいですね、文の書き方が雑です・・・
もっとうまくかけるようになりたいですね＞＜；

オリ主設定（前書き）

設定変えました。
使徒より執行者のほうがいいかなという意見もらったので考えた結果こうしました～。
直属の執行者とかありましたっけ？？

オリ主設定

名前：リリス・プラティエ

性別：女

武器：日本刀のような細身の刀、切れ味はけっこう鋭い。

容姿：ぶっちゃけ黒髪の星光の殲滅者です。けっこう好きなキャラなので^^；

基本的に穏やかで物静か、とてもやさしい性格をしておりあまり争いを好まない。

過去にレンやティオ同様に教団に攫われた過去がある。
隙を見て逃げ出し衰弱して倒れていたところをイリアに拾われる。

戦闘力はかなりの腕前で各地を回っていたときに《身喰らう蛇》の第七柱アリアンロードに出会い、執行者に誘われたほど、本気を出したときはレーヴェをも上回る。
執行者候補としての二つ名は“迅雷”
リリス自体の名前はまったくと言っていいほど知られてはいないが、剣帝を超えるほどの力を持った執行者候補としての迅雷の名は有名である。

2月ほどアリアンロードとアリアンロードを補佐する3人の戦乙女

達と共に行動し、その時にアリアンロードに稽古をつけてもらったこともある。
本人曰く、なんであんなやさしそうな顔をしてるのに稽古の時は鬼のような形相をするのかとのこと。
戦乙女達の中では特にエンネアに可愛がられていた。

作者「まあこんな感じかな。」

リリス「ふむふむ、ネタばれがある気もしますが気にしないでおきましょう。」

作者「うん…気にしないでくれるとうれしいな……」

リリス「わかってますよ、ところで…クラフトとかは決まってるので？」

作者「う～ん、大体決まってるんだけどまだ検討中かな。個人的に雪とか桜とかの文字を入れた技にしたいんだよね。」

リリス「ほほう、それはなぜです？？」

作者「なんかかっこよさそうだし、簡単に決まりそうだからだね！」

リリス「……」

作者「えっと…怒ってる？」

リリス「別にその考えが嫌いなわけではありませんが、一ついい技を思いつきました。
ちょっと試し打ちさせてもらってもいいですか？？」

作者「ほ…ほんと？いいよ見せて見せて……うん？試し打ち？試し切りじゃなくて？」

リリス「はい、ではいきますね…」

作者「なんか嫌な予感が…ていうかおもいっきりあれしか思い浮かばないんだけど…。」

リリス「ルシフェリオン・ブレイカァァァー！！」

作者「やっぱりかぁ～～～！それはいろんな意味で駄目だよ！！
……まあもしもの時はそれでいいかぁ…。」

1話「出会い」

リリス　side

「ということでやってきましたクロスベルです。」

え？1人でなに言ってるのかって？なぜか言わないといけない気がしたからですよ。

グゥ～

「うっ／／／そういえば昨日の夜から何も食べていませんでした。」

う～ん、情報収集もしたいですが…お腹が減りすぎて倒れる…なんて恥かしい事態は避けたいですし…よし！ごはんを食べに行きましょう。

「たしかレストランは中央通りと東通りでしたね…今日は東通りのレストランでチャーハンでも食べましょう。」

私はこう見えてもチャーハンが大好きなんです。なんであの食べ物はあんなにおいしいのでしょうか。ほんとどうして……おっと、思

わず止まらなくなりそうでした。

っと、考え事をしてて気づきませんでしたがもう中央通りですね。
たしかオーバルストアの右側を通って…

「リュウ〜〜遅れてごめｎ、わわ」

「キーア！！」

うん？声がする方を見てみたら女の子が転びそうになってますね、
目の前で怪我されるのは嫌ですし…助けるとしましょうか。

私は瞬動を使い女の子を抱き抱えます。

「大丈夫ですか？」

「ふぇ？」

やはり驚いていますね、知らない人がいきなり現れたのですから。

「えっと、お姉ちゃん誰？？」

「名乗るほどのものではありませんよ、それより怪我はありませんか？」

「うん、大丈夫！！お姉ちゃんが守ってくれたから！！」

「そうですか、それはよかったです。」

笑顔で私に答えてくれる女の子、なぜでしょう…この子の笑顔を見ていると心があたたかくなりますね。

「キーア無事か！？」
「キーアちゃん大丈夫！？」

そこに私と同じくらいの年の男女が４人来ました。

「大丈夫だよ！このお姉ちゃんが助けてくれたから。」

「そうだったのか、ありがとうございます。」
男の人がお礼を言います。なんか年上の女性に好かれそうなオーラが見えますね…
「ありがとうございました。キーアちゃんを助けてくれて。」

灰色の髪をした女の人もお礼を言いました。どこかのお嬢様でしょうか…

「いえ気にしないでください。当然のことをしたまでですので。」

「それでもです。この子を助けていただいて本当にありがとうございました。」

う～ん、そこまでお礼を言われるとは思っていませんでしたね。
この二人は本当にこの子を大切にしているんですね。
あ！もしかしてこの子は…聞いてみましょう。

「この子はお二人のお子さんですか？」

「「えっ！？」」

「いえ、とてもこの子を大切にされているようですので。」

「ち、違います！この子はちょっととある事情で保護した女の子なんです！」
「そうです！私たちは《まだ》そんな関係じゃありません！！」

二人とも動揺しすぎですね。女の人もまだって…まあ男の人は鈍感そうですしまだそんな関係ではないようですね。女の人ファイトです…。

「おっと、そろそろ行かないと授業に遅れるぞキーア。」

「え？うわ！ほんとだ。じゃあ行ってきま～す！！。」

「「いってらっしゃい！！」」

微笑ましい光景ですね、そういえば昔私も姉さんにこんなふうに…やめましょう。
そろそろ行きましょう…お腹が限界です。

「それでは私はこの辺で失礼しますね。」

「あ、今日はキーアを助けていただいて本当にありがとうございました。」

「ふふ、本当に気にしないでください。あなた達とはそう遠くないうちにまた会えそうな気がします。」

私はそう言ってその場をあとにした。

リリス　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ロイド　ｓｉｄｅ

キーアが転びそうになり思わず大声を出してしまった。

キーアが怪我すると思ったけどそんなことはなかった。
気づいたら短い黒髪で整った顔立ちの女の子がキーアを抱えていたからだ。
女の子はすぐ行ってしまったけどまた会えそうだと言ってきた。
本当にそんな気がするのは俺の気のせいかな…

「不思議な子だったわね、すごく綺麗だったし。」

エリィが言う、やっぱり女性から見ても綺麗なんだな。

「たしかにな、俺と同じくらいの年なのかな。」

「ふ、リーダーはあの子が気になるのかい？」

「たしかに綺麗な子でしたね。女の私でも思わず見とれちゃいました。」

ワジとノエルが言う、

「でも…あの子の動き唯者じゃないね…まったく見えなかったよ。」

そこは俺もワジと同意見だ。本当に不思議な子だったな

「おっと、支援要請を忘れるところだった。早くレクターさんを探さないと。」

「そうだったわね、早く見つけてしまいましょう。」

「あの人どこ行ったんでしょうか、いくらなんでも逃げ足速すぎます。」

「まあ、ただの秘書ってわけじゃないようだね。」

とりあえず歓楽街のカジノに行ってみるか。目撃証言もあるし。

ロイド　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

リリス　ｓｉｄｅ

ふう、初対面の人とあんなに話したのは久しぶりですね。

時間を使うだけと思っていましたけど、まさかほしかった情報の一つがこんな所で手に入るとは思ってもみませんでした。

「……キーア、ですか……あれが……

……零の至宝……。」

リリス side end

1話「出会い」（後書き）

疲れた～、たぶんこれが一番長いかも・・・><
相変わらず駄文だな、ほんとにうまくなりたいよ・w・

2話「驚愕！！神仙麻婆《麒麟》」

リリス　side

さて、零の至宝の少女に出会い幸先のいい旅になりました。
私自身あまり《碧き零の計画》に興味はありませんが…なんでしょう。
あのような小さな少女を贄にする計画というのは正直気に入りません。

小さな子どもを生贄にする…非道さを除けばあいつらとやってることは何一つ違わないじゃないですか。あまり干渉はしないつもりでしたが……なんとか守ってあげたいと思ってしまいますね……。

でもそうした場合……アリアさんとも戦うことになるのでしょうか…。
私にできるのかな、一時とはいえ温もりを与えてくれたあの人達に剣を向けることが……やめましょう。考え出したら止まらなくなるのは私の悪い癖ですね。アリアさんやエンネアさんにも注意されていましたし…

グゥ〜

……シリアスぶち壊しですよ私……

「はぁ～、ご飯食べてスッキリしましょう。」

グゥ～

うん？このお腹の音は私ではありませんね。
ということは……いつの間にか私の横にいたシスター服の女性でしょうか。

「あなたもこれからお昼ですか？」

「はい。朝にマフィンを5個ほど食べたのですが足りなかったようです。」

えっと、5個って食べすぎではないのでしょうか…。
私でも2個くらいが限界なのですが……。

「同じ時間にお腹が減り昼食を求めて出会った。これも空の女神のお導きでしょう。
よければご一緒しませんか？」

え？それって女神のお導きなのですか？？

よくわかりませんが断る理由はありませんね、ご一緒させてもらいましょう。

「はい、喜んでご一緒させていただきます。」

「ふふ、ではいきましょう。」

そして私たちは店内に入って行きました。

カラカラ〜〜ン

おぉ、やっぱり前来た時より綺麗になっていますね。
メニューのほうもけっこう増えていますしすごく楽しみです。

「あそこの席に座りましょうか。」

「はい。」

こうして私たちは向かい合うようにして席に座ります。

「さてと、チャーハンをたのm、うん！？」

チャーハンを頼もうとしたとき私の目に飛び込んできた名前がありました。それは…神仙麻婆≪麒麟≫…
なんかすごそうな名前です、値段も高いですね。
私が頼もうか悩んでるときに彼女が声をかけてきました。

「えっとあなたは……そういえば自己紹介をしていませんでしたね。」

シスター服の女性が気づいたように私に言います。
そう言われてみればそうですね、トントン拍子で進んだのですっかり忘れていました。

「私はリース・アルジェントといいます、この度クロスベル大聖堂に赴任してきました。よろしくお願いしますね。」

彼女はリースさんと言うのですか……あちらが自己紹介したというのなら私も名乗らなければいけませんね。ですがプラティエの名は伏せさせていただきましょうか……私がその名前を名乗る資格はありませんから……

「私はリリスと言います、わけあって名前しか名乗れない無礼をお許しください。」

そういって私が頭をさげるとリースさんが言います。

「お気になさらないでください。なにか事情がおありなのでしょう。詮索するという野暮なことはしないのでご安心ください。」

「ありがとうございます。そう言っていただけるとすごくうれしいです。」

私は満面の笑みで彼女にお礼を言いました。

「／／／」

うん？なぜか顔が赤いですね、熱でもあるのでしょうか。

「どうしたんですか？なにか顔が赤いようですが。」

「な、なんでもありません／／／。」

「そうですか…。」

風邪ではないのでしょうか、私がお礼を言ったあたりから顔が赤い

ですし……ほんとにどうしたのでしょう。

※リリスは自分の容姿がかなりいいということに気づいていません。その笑顔で微笑みかけられたら男女問わず見とれてしまいます。

「と、ところでリリスさんは何を注文なさるのですか？」

なぜか誤魔化された気がしないでもないですが……まあいいでしょう。

「そうですね、最初はチャーハンを頼もうと思っていたのですが…気になった物があり悩んでいるんですよ。」

「気になったもの？」

「はい、これです。」

私はリースさんにその名前を見せます。

「神仙麻婆≪麒麟≫ですか…聞いたことがありませんね。何やらすごそうですが。」

「それは私も思いました、だから気になっているんですけど……。」

「では二人でそれを頼んでみませんか？私も気になってしまいました。」

「そうですね、リースさんがよろしいのであれば私は構いません。」

「では頼みましょうか。そこのウェイトレスさんよろしいですか？」

「はいは～い！、ご注文はお決まりでしょうか！」

なかなか元気のいいウェイトレスさんですね。
私と同じくらいの年でしょうか、すこし上……のような感じがします。

「この神仙麻婆≪麒麟≫を2つお願いします。」

「かしこまりました～！少々お待ちください～！」

「元気な方でしたね。」

やはりリースさんも同じことを考えていましたか。

「はい、でもこちらまで元気になりそうで私は好きなタイプですね。」

「ふふ、そうですね。」

そうして二人で話しているうちに頼んだ料理が運ばれてきました。

「お待たせしました～！こちらが神仙麻婆≪麒麟≫になりま～す！熱いうちにお召し上がりくださ～い！」

「こ……これは……。」

リースさんが驚いていますね。
私もけっこう…というかかなり驚いています。

「あの～…リースさん、私の目の錯覚でしょうか。料理が輝いてるように見えます。」

「いえ、錯覚ではなさそうです。ほんとに輝いていますね。」

マジですか…輝く料理って何なのでしょうか。アニメの世界ですよ…。

「こう見てても始まりません、いただきましょう。」

「そうですね、そうしましょうか。」

なぜか異様に緊張しますね、アリアさんとの修行以上に緊張しています。

「それでは…」

「はい…」

「「いただきます」」

「「あむ……んん～～～～！！」」

な…この味は……お、お、

「「おいしいです！！」」

「なんですかこの料理は！？こんなおいしいもの今まで食べたことがありません！！」
おっと、思わず大声を出してしまいました。他のお客さんが見ています／／／

「たしかにものすごくおいしいですね、私も今までいくつもの料理に出会ってきましたがこんなおいしい料理は初めてです。あぁ女神よ……あなたの巡り合わせに感謝致します。」

リースさんが感動しています、かくいう私も感動していますけど……そこにここの店長さんでしょうか？が近づいてきます。

「嬢ちゃん達いい食べっぷりじゃないか！そこまで感動してくれるなんてこっちも作った甲斐があるってもんだ！どうだ？俺のおごりだ、チャーハンもつけてやろう。」

「え？さすがにそこまｄ「あぁ……あなたのご慈悲に感謝致します、ご馳走になります！」リースさん！？」

「リリスさん、店長さんのお心遣いを無駄にしてはいけません。いただきましょう。」

うっ、たしかにうれしいですがそれは……リースさんが目をキラキラさせながら私を見ています。……はぁ～。

「わかりました。店長さんご馳走になります。」

「はっはっは！おうよ、すこし待ってな！！」

「リリスさんありがとうございます。」

「いえ、まあ私も食べたかったですし。」

チャーハンを頼む予定でしたから今回は役得ということで考えましょう。

そして私たちは運ばれてきたチャーハンを食べて店を出ました。

「今日は久しぶりに楽しい食事でした、リリスさん。機会があればまたご一緒しましょう。」

ふふ、そうですね。ほんとに今日は楽しかったです。

「はい、その時はまたよろしくお願いしますね。」

「それでは私はそろそろ行きますね。西通りのパン屋にも行かないとですし。」

「そうですか…（まだ食べる気ですかリースさん…）」
言葉には出さず私はその言葉を呑み込んだ。

「では本当に今日は楽しかったです。それではリリスさん、また会いましょう。」

「はい。ぜひまた。」

今日はほんとに楽しかったですね。そこで私はリースさんと別れその場を後にした。

リリス　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

リース　ｓｉｄｅ

「では本当に今日は楽しかったです。それではリリスさん、また会いましょう。」

「はい。ぜひまた。」

リリスさん…不思議な方でした。
偶然一緒にご飯を食べることになりましたがとても温かいというのが第一印象でした。
クロスベルにきて教会の人に警戒されて気が滅入りそうでしたが大丈夫そうですね。
前に出会ったエリィさんもですがリリスさんともよき友人になれそうです。

しかし、リリスさんとの会話の中で時折見せる彼女の悲しげな表情……あれは…過去になにかあった人が見せる表情です……。
私にはわかります。かつて、ケビンが姉さまを死なせてしまったことを悔やみ時折見せていた表情にそっくりですから……

「リリスさん……いつか私に話してくれる日が来るのでしょうか……」

リース　side　end

2話「驚愕！！神仙麻婆≪麒麟≫」（後書き）

店長さんの喋り方微妙です。
というより店長オリジナル感がバリバリです。

リースは食べ物には目がないということでこんな感じかなと＞＜
ちょっとはっちゃけさせすぎた気もしますが・ｗ・

3話「赤い星座との邂逅」

リリス　side

ふう、お腹いっぱいで満足です♪♪
リースさんとの昼食を終えて私は次の目的地に向かっています。

せっかくクロスベルに来たのですからヨルグさんの所に顔を出しましょう。
1時期私のお世話をしてくれましたからね、私にとっては恩人といっても過言ではない人です。
まあ…そこで知ったんですけどね、《身喰らう蛇》が進めている《幻焔計画》
というものを……。
そしてアリアさんと旅をしている時に聞いたんです。
《幻焔計画》の通過点として《碧き零の計画》を発動させる必要があると。

つまりキーアを守るという名目で戦う場合は…否応なく蛇と対立することになる。

……うぅぅ～、今から憂鬱です、アリアさんに傷をつけることはできなくはないと思いますが、倒すとなると話しは別です……はぁ～、考えても仕方ありませんね。

そうこうしてる間に歓楽街ですね。あ……

「アルカンシェル……ですか……。」

私の前に飛び込んできた建物、私が姉さんと過ごした大切な場所……大切な場所でありもう戻れない場所……

「……行きましょう、ここにずっといるわけには行きません。」

歩きだした私の前に二人の男女が近づいてきました。
女の子のほうは15、6歳でしょうか、男性のほうは私よりも年上ですね。

「いやぁ～、いい揉みっぷりだったよあのお姉さん。」

「まあやりすぎて犯罪するなよ～。」

「しないよ～、でもほんとにいい揉みっぷr……」

うん？女の子と目が逢いましたね。
なんでしょうか……獲物を見つけたような笑みです……。

気にしてもしょうがないですね、行きましょう。

歩いて通り過ぎようとしたところ女の子が前に出てきました。

「お姉さん……強いね。」

「え？」

「強い……悔しいけど、シャーリィよりずっと強い。」

いきなり強いといわれても……この場合なんて答えればいいのでしょう。

まあ思ったことを言いましょうか。

「あなたのほうも相当な腕前ですね、正面に立ってみて改めて伝わってきますよ。あなたの力が。」

この言葉は嘘ではありません、私には及ばないでしょうが。

それでも彼女の実力は相当なものであるというのはわかります。

「なんかお姉さんに言われるとうれしく感じちゃうなぁ。」

年相応の笑顔…というのでしょうか。
雰囲気でわかりますが、この子はきっと幼い頃から戦場に立っていたのでしょう。
私がいろいろ考えてる時に彼女が聞いてきました。

「お姉さん名前は？シャーリィはシャーリィ・オルランド。」

「私はリリスです、よろしくお願いしますね、シャーリィさん。」

「シャーリィでいいよ～、その代りリリスのこともリリスって呼んでいいかな？」

「構いませんよ、では改めてよろしくお願いします、シャーリィ。」

「うん、よろしくリリス。」

可愛い子ですね、できればこの子とは戦いたくはないものです。

そこに後ろで控えていた男性が声をかけてきました。

「お～い、仲良くなってるとこ悪いがそろそろ行くぞ～。」

「あ、うんわかったよ～。それじゃ～ね～リリス、また会おうよ。」

「はい、縁があればまた。」

そういって私たちはすれ違います。
そのとき確かに聞こえました……

……次は思いっきり殺り合おう……と。

「ふむ、さすがは噂の“血染めのシャーリィ”ですか…。」

彼女がクロスベルにいるということは、すでに父親のほうもクロスベル入りしている可能性が高そうですね。

「これは赤い星座のこともヨルグさんに聞くことにしますか。」

おそらく赤い星座については知らないと思いますけど…。
さて行きましょうか、ここを進んで住宅街を抜ければマインツ参道ですね。

リリス side end

3話「赤い星座との邂逅」（後書き）

リリス視点は主にゲームでロイド達が主要人物と出会った後と前でロイド達とはかぶらないようにしたいと思います。
場面によっては会うこともありますが、主要戦闘くらいですね。
アリオスと戦わせてみたいです・w・

それではまた～。

4話「マインツ山道の人形工房　前編」

リリス　side

みなさんこんにちわリリスです。
今私はマインツ山道の分岐点、つまりバス停にいます。
え？早すぎるって？歩いて行くわけないじゃないですか、バスっていう立派なものがあるのに歩いて行く道理がありません。

「さて、左はマインツトンネル道なので右ですね、人形工房は。」

どうせなら人形工房前までバスも運行してくれると楽なのですが……そんな贅沢も言ってられないですね。

「はぁ～、登りましょうか……。」

私はあたりを見回しながら進んでいきます。

「この辺はあの頃とあまり変わっていませんね、まあ来る人があまりいないっていうのも理由の１つでしょうが。」

そうですね、ここに来る人はあまりいません。

用があるといえばヨルグさんに人形を作ってもらいたいひとが頼みに来るかアルカンシェルで使う機材や人形器具などを調達するくらいですか。

そういえば少し前にレンが訪れたそうですね。
久しぶりにお話ししたかったのですけど……あの子はやっと家族というものを手に入れたんです。
今は素直に喜ぶとしましょうか。
連絡を取ろうと思えばいつでも取れますしね。

カサカサ……

「うん？」

先ほどからなにか気配がするとは思いましたが案の定魔獣でしたか……。
それに……けっこう大きいですね、こんなものが参道にいては通る人の迷惑になりかねません。

しょうがないですね、倒すとしm！？
ドン！ドン！

「増援……7体沸いたということは。」

全部で８体……しかし、私の敵ではありません。
腰にさした刀を抜き私はクラフトを発動する。

「一の舞、夜桜」

リリスは一瞬で魔獣達の背後に回り強力な一閃を放つ。

ーーシュンーー

音はわずか、しかしその威力は受けた者の命を刈り取るには十分だった。

「痛みはありません、斬られたとわかった時はすでに……。」

バタン！　バタン！

「命潰えた後でしょうから。」

あれ、命潰えた後では斬られたとわかりませんね……気にしないで進みましょう……。

「さて、もうすぐ工房ですね、日が暮れるまでにはクロスベルに戻りたいですし急ぎましょうか。」

余談ですが、リリスが倒したこの魔獣がクロスベル警察特務支援課に手配魔獣討伐依頼として来ていたことを知るのは後のことになる。

「ふう、着きましたね。」

相変わらずここは変わっていませんね。
まあヨルグさんらしいといえばらしいのですけれど。

「さて入るとしましょうか。」

門に手をかけようとしたときに声が聞こえました。

「すこし待っておれ、人形に案内をさせよう。」

すると扉が開き小さなアンティークドールが出てきました。

「私が来たことはお見通しですか……どこでわかったのでしょうか。」

人形についていくと部屋に入りました、ここも変わっていませんね。
部屋の中には一人の老人がいました。

「まあいろいろ聞きたいことはあるが、まずは久しぶりと言っておこうかの。」

「そうですね……お久しぶりです、ヨルグさん。」

なにを聞かれるかわかりませんが今はこの再開を喜ぶとしましょう。

リリス　side　end

5話「マインツ山道の人形工房　後編」

リリス　side

みなさんこんにちわリリスです。
今私は人形工房でヨルグさんとの久しぶりのお話しに花を咲かせています。

「ふむ、そうか。アリアンロードに修行をの。」

「はい、アリアさんにはほんとにお世話になりました。」

「アリアさんか、あの者を愛称で呼ぶのはお前くらいのものだな。」

「うぅ～、いけなかったでしょうか……アリアンロードさんだと長くて大変なんですよ～。」

「まあよいだろう、あの者は使徒の中でも卓越した力をもつやつだ。故に対等に話しかけてくる者もあまりおらんかったのかもしれん。その点でならお前のことはさぞ気に入ってるのやもしれんな。」

「ふふ、そう言ってくれるとうれしいですね。

できれば本人の口からききたい言葉ですけれど。」

もし言われてしまうと私はあまりのうれしさに飛び跳ねてしまうかもしれません。あの人は私の憧れなのですから……あ！もちろん１番の憧れは姉さんですよ、こればかりは譲れません。……姉さん……

私が若干俯いているとヨルグさんが声をかけてきました。

「ふむ、その様子だとお前の姉には会ってないのだな。」

「！？……いけませんね私は、姉さんのことを考えるとすぐ顔に出てしまいます。」

ヨルグさんは鋭いですね、思えば昔から私の思いの内を察して話してくれていましたね。その心遣いに私はどれだけ救われたでしょうか。

「まああの姉のことだ、どんな過去を持っていようがお前のことを受け入れてくれると儂は思うがな。」

「……そうですね、おそらく今会いに行ってもあの人は私を思いっきり抱きしめてくれて……ただ一言、おかえりと言ってくれると思

います。ですが……私は……。」

そうです、姉さんはとてもやさしいですから。
でも……だからこそ私は……

「……教団での出来事が引きずっておるのか。」

「……はい……。」

「教団はもうおらん、ヨアヒムもすでに死んでおる。
お前を縛るものはなにもないはずだがな。」

「そうですね、でもやはり忘れられないんです。自分が生きるためとはいえ……私を受け入れてくれた人達をこの手にかけたことが……。」

あれは今でも忘れられません。
何日にも続いていた薬物投与と脳をいじられていた生活に私は心を壊しそうになっていた。
そして私は奴らの一言に心を許してしまった。

ーーお前が今もっとも親しくしている者を殺せばここから出してやるーー

その瞬間、私の中で何かが弾けた。

グサッ！ズブ！グシュ！

「アハハハ、これでコレデ私は自由にナレル。」

ズブ！グサッ！

四肢を切り落とし、内臓を抉り出し、人間の原型が留めてないほどに私はその友人を壊しつくした。
まるで……相手を壊すことを楽しむかのように……。

気づけば私は涙を流していました。

「私は……またあの時の感覚が蘇ってくるのが怖いんです！！あの人を壊すことを楽しんでるような自分が！！もしかしたら姉さんにも同じことをしてしまうかもしれないって！！。」

「それが……お前を大切なものから遠ざけている理由か……。」

「……はい。」

「ふむ……しかし儂のいうことは変わらんな。」

「えっ？」

「それでもやはり、お前の姉はお前を傍に置いとくと思うぞ儂は。」

「ふふ、そう……でしょうね、それが……姉さんですものね。」

ふふ、なぜか不思議と気持ちが軽くなりましたね。
ヨルグさんには感謝しないといけません。

「今すぐとは言わん、近いうちに会いに行ってみるといい。
それがお前ら姉妹のためにもなる。」

「そうですね、今すぐはまだ心の整理がつかないのでなんとも言えませんが、近いうちに必ず会いに行きます。」

今の私はどんな顔をしているのでしょう。
ただ……これだけは言えます、私はもう……泣いていないって。

「ふふ、ありがとうございます、ヨルグさん。」

「礼などいらん……それよりこれからどうするんだ？外はすでに暗いが。」

「えっ。」

ふと時計を見ると……ほんとにもう夜ですね……。
もうおそらくバスは動いてないでしょうし……困りました。

「その様子だと帰る手段が思いつかないといったところか。」

「うっ……わかりますか。」

うぅ～／／／恥ずかしいです。
ちょっと挨拶してお暇する予定でしたのに話し込みすぎました……。

「ふむ、なら今日は泊まっていくといい。」

「え？よろしいのですか？？迷惑なのでは……。」

「ふ、今さら遠慮する必要もあるまい。」

そうですね、この際お言葉に甘えさせていただきましょうか。

「わかりました、今日1日お世話になりますね、ヨルグさん。」

ヨルグさんにはほんとに感謝してもしきれませんね。

あ！　そうです。

「ヨルグさん、今日の夕食は私に作らせてください。」

「そうだな、久しぶりにお前の料理を食べさせてもらおうかの。」

「はい！！」

今日は腕によりをかけて作らせていただきます。

覚悟してくださいね、ヨルグさん。

～夕食時～

「ふむ、ほんとにお前は料理がうまいな、久しぶりに食べたがあの頃より腕が上がっているようだ。」

「ふふ、ありがとうございます。」

やはり自分の作ったものを褒められるのはすごくうれしいですね。がんばって作った甲斐がありました。

さてと、それではそろそろ聞きたいことを聞くことにしましょうか。

「ヨルグさん、２つほど聞きたいことがあるのですがよろしいですか？」

「なんだ？儂に答えられる範囲でなら答えよう。」

「ありがとうございます、まず一つ目ですけど、≪身喰らう蛇≫は此度の計画にどれほどの戦力を回してくるのかを教えてほしいのです。」

「ふむ、≪幻焔計画≫か、一つ言えることはリベールのように本格的に介入してこないことだな。お前が知っている通りアリアンロードともう二人……“第六柱”と“道化師”が来ると聞いておる。」

「第６柱と道化師……博士とカンパネルラさんですか。」

アリアさんだけでも厄介ですけどその二人も十分厄介ですね。
博士が来るということはゴルディアス級が出てくる可能性が高いです。
カンパネルラさんは神出鬼没ですし対処の仕様がないですよ……。

「まあどいつも厄介なことに変わりはない。」

「そうですね、いずれ見えるでしょうしその時ですね。」

「まあ明日第六柱と道化師が訪ねてくると言っていたが。」

「そうなんですか？なんでまた……。」

「なんでもゴルディアス級の最終型がどうとか言っておった。
大方自慢もあるだろうがな、まったく忌々しい。」

「あはは、相変わらず仲悪そうですね。」

「当たり前だ、あんなのとは顔も合わせたくはない。」

これは相当ですね……お二人の間に何があったのでしょうか。
気になりますが聞かないでおきましょう。

「ヨルグさん、その二人が来たときは私も挨拶していいですか？」

「ふむ、まあいいだろう。奴らにとってもたいして気にはせんだろうしな。」

「ふふ、ありがとうございます。」

さて、明日が楽しみですね、敵として見えるとはいえ知り合いですから。

「ではもう一つ、赤い星座について何か知ってることはないですか？」

「ふむ、ゼムリア大陸最強の猟兵団か。
クロスベル入りしたということはわかってはおるが詳しいことはわからんな。」

「そうですか、わかりました。」

「力になれんですまないな。」

「いえ、そんなことはありません。
身喰らう蛇の情報だけでも十分すぎるくらいですから。」

「ふ、そうか。」

さて、聞くことも聞きましたしそろそろ休みましょうか。

「それではヨルグさん、私はそろそろ寝ようと思います。」

「わかった、人形に部屋へ案内させよう。」

「わかりました、それではヨルグさんおやすみなさい。」

「うむ、ゆっくり休むといい。」

「はい。」

こうして人形工房での１日が過ぎていきました。

リリス　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

6話「蛇の使徒と執行者」

リリス　side

「ここはどこでしょうか、真っ暗です……。」

私は今何も見えない真っ暗な空間にいます。
たしかに昨日人形工房で寝たはずなのですが……

ということは考えられるとするならば……

「夢……なのでしょうか。」

ここ最近夢というものを見ていなかったのでなんか変な感じですね。
そんなふうに私が思っていると目の前に映像が広がってきました。

「これは……昔の私と……姉さん?」

そこには、私が姉さんに拾われて2月ほど経ったときの映像が流れていました。

・

・

・
・
「次はこの服を着てみなさい、リリス。」

「すこし派手じゃないでしょうか、私には似合いませんよ。」

「い〜や、絶対似合うわ。私が保障するから！」

「うぅ、わかりました。着てみます。」

懐かしいですね、あの頃の私はあまりオシャレというものをしていませんでしたからよく姉さんに言われていました。オシャレってきれいな人がするものでは？と姉さんに言ったら「ならリリスもしないとダメじゃない」と言われましたっけ。私は自分の容姿が優れているとは思えないのでその言葉の意味が当時はわかりませんでしたね。

「着てみました。」

「やっぱり私が言った通りね！すごい似合ってるわよリリス。」

「／／／そうでしょうか、自分ではよくわかりません。」

「リリスは自分の容姿に自信を持ったほうがいいわよ、振り向かない男はそうそういないと思うわ。」

「別に男の方に振り向いてもらわなくても……姉さんにさえ見てもらえれば……。」

「え？最後のほう聞こえなかったんだけどなんて言ったの？」

「／／／なにも言ってません！」

「え～、絶対なにか言ってたわよ、いいからお姉さんに言ってみなさい！」

「だからなにも言ってないって言ってるじゃないですか～！」

ふふ、懐かしいです。
あの後ずっとなにを言ってたのか聞かれていましたね、結局言ってませんけど……

もし、もし許されるなら……あの頃の生活に戻りたいですね……姉さんとまた一緒に……

ピピピピピピピピピピ！！

「うっ！？」

そうでした、目覚ましをかけていましたね。
いいところだったので怒ればいいのか、気持ちが沈んだ所でちょうどよかったと喜べばいいのかわかりませんね……

「ヨルグさんは……」

ヨルグさんはいませんね、そういえば今日は博士とカンパネルラさんが来ると言っていました。

「ということはもうすでに？」

行ってみましょうか、お二人に会うのはほんとに久しぶりです。
どういう反応されるのでしょうか……

私は扉を開けて外を見てみると思ったとおり、ヨルグさんとお二人がいました。

「博士、僕たちは喧嘩をしに来たんじゃないんだからもうすこし穏便……あれ？」

「ん？どうしたカンパネルラ……おや？」

お二人とも気づいたようですね、黙っているのもなんですし挨拶しましょうか。

「お久しぶりですね、博士にカンパネルラさん。」

「リリスじゃないか！久しぶりだね、まさかクロスベルにいるとは思わなかったよ。」

「たしかにな、なにかクロスベルに用でもあったのか？」

上からカンパネルラさんに博士が聞きます。

「これからクロスベルでなにかが起きるかもしれないのを黙って見ていることなんかできないということですよ、お二人とも。」

「そうか、たしかクロスベルにはお前の姉がいたな。」

「はい。」

「そっか、でも……どんな理由があっても僕たちは手を引かないよ？」

そんなことわかっていますよ、私自身そんなことはありえないと思っていますし。

「わかってますよ、すべては大いなる≪盟主≫のために。ですよね。」

「ウフフ、わかってるじゃない。」

「だからこそ私も手を引くことはできません、クロスベルを……姉さんを守るためなら……たとえどんなにあなた方が強大であったとしても刀を向けさせていただきます！」

「ふふ、いいのかい？そうなるとあの人とも戦うことになるよ？」

「……覚悟はできていますよ。」

「そうか、まあ僕たちの計画にとって君は大きな壁になりそうだしあの人には勝ってもらいたいけどね。」

「そう簡単には負けてあげませんよ？といってもたとえあの人が相手でも負けてあげるつもりはありません。」

そうです、たとえ相手がどんなに強くても負けるわけには行きません。

「まあ僕たちよりも赤い星座を気にしたほうがいいと思うよ、彼らは獣みたいなものだからね。」

「そうですね、もちろんそちらのことも考えています。」

「ふふ、精々がんばりなよ。陰ながら応援くらいはしてあげるからさ。」

「応援するくらいならこちらの力になってほしいものですけどね……。」

まったくそのとおりですよ、私一人ではいくらなんでも限界がありますからね。

「ふふ、それは無理さ。っと博士は……。」

そういえば博士のことを忘れていましたね、すっかりカンパネルラさんと話し込んでしまいました。

「だから調整を頼みたいのだよ。」

「自分でやったらどうだ、儂はお前にはあまり関わりたくないと前にも言ったはずだ。」

……ヨルグさんどんだけ博士のこと嫌いなんですか。

「あの〜、カンパネルラさん？」

「ん？なんだいリリス。」

「あの二人はなぜあんなに仲が悪いのですか？」

「さあ？僕もあまり詳しいことはわからないんだよ、いつも会うと喧嘩ばかりしてるからなにかあったんだろうとは思ってるんだけどね。」

「そうですか……うん？」

向こうから誰か着ますね、あれは……

「……特務支援課……ですか。」

リリス　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

7話「再会」

リリス　ｓｉｄｅ

あちらから来るのは特務支援課ですね。
あの人たちは身喰らう蛇について知っているのでしょうか……レンと関わっているのであれば組織の事くらいは聞いているかもしれませんね。
人物までは知らないでしょうが。

それにしても……ヨルグさんと博士の話し終わりませんね……

「くどい。おぬしを入れるつもりはない。
いかに≪十三工房≫の統括者とはいえ、立ち入る権利はないはずだ。
」

「……フフ、まあいいだろう。
アレはＮｏ．ＸＶの所有物、元より取り上げるつもりはないさ。」

Ｎｏ．ＸＶ……レンの所有物ですか、まああれをあの子から取り上げるというのであれば私はあの子の味方をしますよ……博士？

「っ！？、し、しかしマイスター？データは一通り渡してもらうよ

？」

あ、ちょっと殺気を出してしまいました。博士が動揺しています……カンパネルラさんがちょっと笑っていますね、うん？口パクでなにか言っています……

“あの子がかわいいのはわかるけど過保護すぎじゃない？”ですか……

……余計なお世話ですよ？少しＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩをしてほしいのでしょうかね、カンパネルラさんは。」

「！？」

あ、カンパネルラさんが震えてます、どうしたんでしょうか……

「（今リリスの声でＯＨＡＮＡＳＩというワードが聞こえた気がするよ……うん、余計なことは考えないようにしよう。僕はまだ死にたくはないからね……）」

なんかカンパネルラさんが一人で頷いています、ほんとにどうしたのでしょう。

っと、まだ話しは……終わっていませんね、……長いです。

「それが“あの方”の御意志でもあるのだからねぇ。」

「……フン、おぬしに言われるまでもない。」

本当に仲が悪いですね、今度なにがあったか本気で聞いてみましょうか。

「ウフフ、本当に仲が悪いなぁ。」

そこに今まで話さなかったカンパネルラさんが口を開きました。

「博士も嫌われていると判っててわざわざ訪ねなきゃいいのに。」

その通りですね、私なら絶対嫌われている相手の元には姿を現そうとは思いません。

「ハハ、何を言ってるのかね？私とマイスターは旧知の仲。特に人形作りに関しては固い師弟の絆で結ばれているんだからねぇ。」

……師弟の絆ですか、とてもそんなふうには見えません。

「フン、戯言は止めるがいい。
所詮儂の技術など結社にしてみれば古臭いもの。
おぬしの≪統合理論≫があれば儂に頼る必要などあるまい？」

統合理論……聞いたことありませんね、まあ私も結社についてそこまで詳しく知っているわけではないですから仕方ありませんけど。

「フフ、ご謙遜を。
こと人形の調整にかけてマイスターの右に出る人間なんでこの世に存在しないさ。」

そうですね、私もそれは思います。人形作りでヨルグさんに勝る人などいないでしょう。

「あ、でも≪パテル＝マテル≫に付けたあの回路だけはいただけないねぇ？あれじゃあ、せっかくの≪殲滅天使≫のポテンシャルが無駄になってしまうじゃないか。」

っ！？この人は！！

「……この外道が。」

私も口を出そうとしたとき来訪者が来ました。やっと来たんですか、特務支援課……

「えっと、すみません。」

「おや……？」

「あれ？お客さんみたいだね。」

お二人も気づいたのか話しが終わりましたね。

「……カンパネルラ、用件は済んだだろう。
その不快な男を連れてとっとと立ち去るがいい。」

不快って……まあわたしもさっきの会話を聞いているうちにそんなふうに思ってしまいました。

「ウフフ、了解。
ほらほら博士、さっさと次に行かないと。
今日中に用を済ませてラボに戻るんだろう？」

「フフ、もちろんだとも。
それではマイスター、これで失礼されてもらうよ。
例の子たちも完成しだい、チェックをお願いするからね？」

「……くどい！とっとと失せるがいい！！」

あぁ、ヨルグさんついに怒ってしまいましたね、これはとうぶん機嫌が悪いかもしれませんね。

「ウフフ、それじゃあまた、リリスもまたね。」

「はい、またお会いしましょう。」

また……ですか、きっと次会うときは戦う時ですね……

お二人が去っていきます、ていうか特務支援課のみなさんボーっとしていますね。
そりゃそうでしょうね、いきなりこんな場面に出くわせば誰だってこうなりますかね。

「……何を呆けている。」

４人が慌てて来ます。

「す、すみません。」

「その節はどうも……ご無沙汰していました。」

上から前にも言いましたが年上に好かれそうな男性と灰色の髪でお嬢様のような女性が言います。

「特務支援課か、久しいな。」

私もあいさつしておきましょうかね、黙って立ち去るなんてできそうにないですし。

「ふふ、またお会いしましたね、みなさん。」

「君はあの時の……」

「知り合いだったのか？リリス。」

「いえ、知り合いというほどのものでもありません、昨日すこし話したくらいですよ。」

「ふむ、そうか……」

ヨルグさんがすこし考える仕草をしたあと彼らに向き直ります。

「レンはリベールへ去った、今さらここに何の用だ？」

やっぱり機嫌悪いですね、ヨルグさん。

「いえ、近くに来たので挨拶に伺っただけなんですよ。」

「その……来客中に失礼しました。」

「フン、招かれざる客だ。その辺は気にしておらん。」

招かれざる客ですか、博士からすればたしかにそうでしょうね。
私としては久しぶりに会えるということでうれしさはありましたが……

「だが今は特に話すこともあるまい。」

そう言ってヨルグさんは工房の方を向き

「何か用件ができたら改めて訪ねてくるがいい、レンに免じて話くらいは聞いてやろう。」

なんだかんだで話しを聞いてくれるのがヨルグさんのいいところですね。

「あ……」

どうやら彼には予想外の返答だったようです。

「リリスも何か困ったことがあればいつでも来るといい、儂にできることなら力になろう。」

ふふ、やっぱりやさしいですね。ヨルグさんは。

「はい、その時はぜひ力を貸してもらいます。
それではまた会いましょう、ヨルグさん。」

「フ、またな。」

ヨルグさんの門の内側に入ると門が勝手にしまりました、どこかにセンサーでもあるのでしょうか。

「か、勝手に門が閉まった……」

やっぱり驚いていますね、この反応だと彼女がここに来たのは初めてでしょうか。

「ふぅん、古めかしいけど何か仕掛けでもあるのかな。」

もう一人の彼もそうは言いますがあまり驚いてはいませんね。

「ああ……とんでもないカラクリを作っている場所だからな。それに……さっきの来客も気になるな。」

気になる……ですか、この人……きっと警察官としての感は相当な物なのでしょうね。

「ええ、招かれざる客って言ってたけど……何ていうか、その……

怪しげな感じだったわね。」

ふふ、怪しげですか、博士はともかくカンパネルラさんは怪しさ満点ですね。

「そうですね……まあ危険そうには見えませんでしたけど。」

危険そうには見えないですか……今は……ですよ？

「（……フフ、危険そうには見えないか。）」

彼はなにか知っていますね、それに……彼はなにか隠している気がします、その何かはわかりませんが他の人たちも知らないことでしょうねきっと。

「そうだ！まさか君がここにいるとは思わなかったよ。」

「本当ね、なにか知り合いだったみたいだけど」

ふと気づいたように彼らが聞いてきました。

「そうですね、簡単に言えばヨルグさんには昔に助けていただいたことがあるんです。私にしてみれば恩人なのですよ。」

「そうだったのか、それにしても君の言った通りだったな。」

「うん？何がですか？」

はて……私は彼らに何か言ったでしょうか。

「昨日会ったとき、“また近いうちに会えそうだ”って言ってただろ？」

「あぁ～、そういえば言いましたね。
まさかそれが1日後の今日だとは思いませんでした。」

「ふふ、そうね。
ちょっと挨拶にきただけなのにあなたに会えるなんて思っても見なかったもの。」

「そうですね、それはわたしもですよ。」

たしかにこんなにはやい再会は私自身予想外でした。

「そういえば俺たち、なんだかんだで君の名前聞いてなかったな。」

そういえばそうでした、キーアを保護していることしか私自身彼らのことを知りませんね。

「ああ、そうですね。それでは自己紹介でもしましょうか。こうして再び会えたのも何かの縁でしょうし。」

「そうだな、俺はロイド・バニングス。よろしくな。」

「エリィ・マクダエルよ、よろしくね。」

「ノエル・シーカーです、よろしくお願いします。」

「ワジ・ヘミスフィアさ、今後ともよろしく頼むよ。」

「はい。私の名前はリリスです、みなさんよろしくお願いしますね。」

思わぬ所で彼らと知り合いになってしまいました。

……ですが……なんでしょうかこの違和感は……まるで彼らと知り合うことが決められてしまったような感覚です。
まさか、私がクロスベルに着いたときにキーアを助けて彼らと知り合うというのも決められたこと？

私がクロスベルに行く日に見た夢で聞こえた少女の声が気になります……う～ん、考えても仕方ありません。いずれわかることでしょう。

リリス　side　end

??「悪夢」

月が輝く中、アルモリカ古道の先、古戦場で対峙する二つの影があった。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

「うぅ……はぁ……すぅ……」

お互い長い間戦っていたのか息が絶え絶えになりながら片方の人影が言葉を発する。

「どうして……どうして姉さんを守れなかったの！あなたはずっと姉さんの傍にいたのでしょう！？」

「っ！？わたしは……」

「あなたが姉さんのことを大切にしてくれてるって思ったから！！私はあなたに姉さんを守ってくれるように頼んだの！！姉さんのために……暗殺者の道を捨ててくれたあなたに！！」

「……わた……し……は……」

大切な存在を失い、憎悪を宿らせた瞳の少女。

大切な存在を失い、悲しみと絶望を宿らせた瞳の少女。

二人はともに大切な存在を目の前で奪われた。

元々彼女たちは互いに親友ともいえるべき存在だった。

二人は暗闇の道を歩き続けてきた。

そんな道を歩む中、一人の女性の手によって二人は光を手にすることができた。

だが、運命は無情にも二人の元から光を奪い去った。

女神が誤った道を指し示すかのように二人はその道を進み、そして……

「私は……あなたをゆるさない！！」

「くっ！？」

お互いが激しい斬撃を繰り出す。

しかし、その戦いもすぐに決着は着いた。

ズブッ！！

「……あ……ぁ……」

黒い短めの髪の少女の剣は青紫の髪の少女の心臓を貫いた。

グサッ！！

「……う……うぁ……」

そして青紫の髪の少女もまた、黒い短めの髪の少女の心臓を貫いていた。

大切なものを失い、殺し合いをした世界。

これも一つの未来だったのだろう。

幼き少女は思う、そんな世界はあまりにも悲しすぎると。

だから幼き少女は力を振う、よりよい未来を築き上げるために。

……叶わぬならば……すべてを“零”に……

8話「新しい絆」

人形工房から山道を下る影が5つ。

クロスベル警察特務支援課と我らが主人公リリスである。

「へぇ～、8年ぶりにクロスベルに帰ってきたのか。」

特務支援課リーダーのロイドが言う。

「はい、久しぶりに帰ってきたのですがあまり変わっていなくてホッとしましたよ。」

このリリスの気持ちは本当である。
大好きな姉と共に育った町があまりに変わりすぎているかもしれない、これがリリスにとっては心配だった。
だがそれも杞憂だった、彼女にとって一番安心できたのは何よりアルカンシェルであろう。
クロスベルの中でも特に大切な場所、彼女が本当の自分を見つけることができた場所なのだから。

「ねぇ、リリスさんは今までどこにいたのかしら？」

特務支援課メンバーの一人、エリィが聞く。

「そうですね、私は今まで各地を転々としていたんですよ。
だからどこかにの町に住んでいた、ということはありませんね。」

「そうなの……その年で各地を回るっていろいろと大変なこともあったのではないの？」

エリィの疑問も当然である、リリスの年は１７歳。
自分と変わらないくらいの年なのだ、エリィ自身も大陸を回ったことはある。
しかしそれは自分の叔父であるマクダエル議長と共に回っていたからだ、決して一人でいたわけではない。

「そうですね……たしかに大変なことも多々ありました。
ですが私は……過去の自分を許すことができなくて旅に出たんです、家族を捨てて……」

リリスの顔が悲しみで染まる。
最愛の姉と離れること、それは彼女にとって何事にも代え難いほどの悲しみを伴う選択だったのであろう。

「えっと……ごめんなさい、なにか嫌なことでも思い出させてしま

ったかしら……」

「いえ、かまいませんよ。
この道を選択したのは私です、後悔はしていない……といえば嘘になってしまいますけど……」

リリスは笑う、だが周りの４人はそれが強がりの笑顔というのがわかってしまった。

「えっと、私には妹がいるんですけど……リリスさんの家族はどういった方だったんですか？」

警備隊からこのたび特務支援課に異動してきたノエルが言う。

「家族ですか……先ほど言った家族というのは本当の家族ではないんです、私は本当の自分の家族がどういった人なのか、顔も知りませんから……」

またもや暗い話題になってしまった、ロイドとエリィがジト目でノエルを見る。

「え……えっと……本当にすみません！！」

「ふふ、構いませんよ。
私は確かに本当の家族を知りません、ですが私は今の家族に家族以上の愛情をもらいました。
ですから私は幸せなんですよ、決して悲しくはありません。」

「そうですか……」

4人は思う、なぜ彼女はこんなにも強いのかと。
だからこそ4人は聞きたいと思った、家族がいない彼女をこんなに幸せに満ちた顔をさせた今の家族がどういった人たちなのかを。
しかし聞きづらかった、さっき彼女はその家族を捨てたと言ったのだから。

「ふふ、私の今の家族がどういった人なのか知りたい……そんな顔ですね。」

「「「「!?」」」」

4人は驚く、それもそのはず。
思っていたことをこうも簡単に言い当てられたのだから。

「そうですね、別に隠さないといけないことでもないですし話すのは構いません……聞きたいですか?」

「……いいのかい？聞いても。」

わけあって特務支援課にきたワジが聞く。

「構いませんよ、私自身……なぜかわかりませんがあなたたちのことは嫌いではないです、むしろ好意的です。本当になぜかはわかりませんが。」

リリスは本当になぜかわからないというふうに笑いながら言う。
４人は嬉しかった、好意的に見ているというのは誰に言われても嬉しいだろう。
リリスに受け入れてもらえた、それが４人にとってはすごく嬉しかった理由なのかもしれない。

「じゃあ聞かせてもらえるかな、君の家族のことを。」

「はい、私には……姉がいました。」

リリスは当時を思い出すように話し出す、その顔は本当に大切な人を想うやさしい顔をしていたと後に特務支援課のメンバーは語ったという。

「姉は……一言でいうなら“太陽”のような人……でしょうか。」

「太陽？」

「はい、姉は見る人すべてを魅了するかのような人でした。」

「すごいお姉さんなのね、ふふ……リリスさん本当に楽しそうに話すから。」

「はい！本当にすごい姉さんだったんですよ。」

４人は内心驚いていた、リリスは一言でいうなら俗に言う“クールビューティー”な感じであろう。
そんな彼女が目を輝かせながら姉をすごいと言っているのだから。

リリスの話は続く。

「姉さんは私に光をくれたんです、暗闇の道を歩いた……生きる意味を見いだせなかった私に。」

「本当にリリスはお姉さんのことが好きなんだな……でも……でも

どうして君は……そのお姉さんの傍を離れたんだ？」

ロイドが聞く、それはほかの３人も思ったこと。

「……すみません、それは私が姉さんに拾われる前のことが関係しているのですが……それはまだ話せません……ごめんなさい。」

「いや……構わないよ、ありがとう。話してくれて。」

「本当にいい話しだったわ、あなたのお姉さんに会ってみたいわね。」

「はい、一度妹のことについてお話ししてみたいですね。」

「フフ、久しぶりにいい話しを聞いた気がするよ、ぜひ僕もその姉に会ってみたいね。」

上からロイド、エリィ、ノエル、ワジが言う。

「ふふ、もしかしたら会えるかもしれませんよ？姉さんは今クロスベルにいるので。」

「そうなのか！？」

「はい……私自身今すぐにでも会いたいのですが……まだ心の整理というものができていなくて……」

そう、リリスは今すぐにでも姉に会いたい、姉の胸に飛び込みたいと思っている。
しかし過去の自分の記憶がそれを邪魔してしまう。

「そうか……でも早いうちに会った方がいいと思う、俺はそう思うよ。」

「ふふ、ありがとうロイドさん、それにみなさんも。
みなさんと話すうちに私自身心が軽くなった気がします。」

「ふふ、私たちもリリスさんの力になれてよかったわ。」

「本当です、もし困ったことがあればいつでも言ってください。」

「そうだね、その時はぜひ力にならせてもらうよ。」

「みなさん……本当にありがとうございます。」

リリスは嬉しかった、自分の身の上の話しはすべて聞かせたわけではないが、自分を受け入れてくれた特務支援課が温かい場所だと感じた。

「よし！そろそろバス停だな、リリスはどうするんだ？」

「そうですね、私はバスでそのままクロスベルに戻ろうと思います。みなさんとはバス停まででですね……私自身もうすこしみなさんと話したいと思っていたのですこし残念です。」

リリスはシュンとした、リリスは気づかなった。
数人が顔を赤くしていたことに。

「と、とりあえず進みましょう。
私たちも早くマインツに向かわないといけないし／／／。」

「そ、そうですね。
時間は限られていますから急ぎましょう／／／。」

「フフ、そうだね。
リーダー、先に進もうか。」

「そうだな……っと、どうしたんだ二人とも、なんか顔が赤いようだけど。」

「な／／／！？なんでもありません／／／／！」

「そ、そうか……。」

「ふふ、行きましょうかみなさん。」

リリスは新しい絆を手に入れた。
この絆が後に奇跡を生むことになるのを今はまだ、誰も知らない。

8話「新しい絆」（後書き）

二つ名決まりました！！

設定に付け加えました。

9話「リリスの力」

エリィ　side

みんなこんにちわエリィよ。
私たちは今リリスちゃんと一緒にバス亭に向かっているところよ。

「それにしても……さっきのリリスさんのシュンとした姿……可愛かったですね。」

隣を歩いていたノエルがそう言ってきたわ。

「そうね、たしかにあの時のリリスちゃんは可愛かったわ……思わず抱きしめちゃいそうになったもの。」

私は前を歩いているリリスちゃんを見ながら言う、クールな感じはするけれど時折見せる年相応の子供らしさが一層リリスちゃんを可愛く見せてしまうのかしらね……

「あはは……それは私もです、フランとはまた違った可愛らしさですよ。」

「ふふ、ノエルさんはフランちゃんのことになると人が変わるものね。
いつだったかしら……フランちゃんにお礼をしたいって人がいて、その時にフランちゃんが好きな人がいるって言った時のノエルさんすごく慌てていたものね。」

「あ／／／あれは姉としてすこし気になっただけです！！」

もう、ノエルさんったらこんなに慌てちゃって。
まああの時は私たちもすこしだけびっくりしていたのだけどね。

「お～いエリィ～！、ノエル～！どうしたんだ～？」

あら、いつの間にかロイドたちと離れていたのね。

「ノエルさんいきましょう、離されてしまっていたわ。」

「あ、本当ですね、行きましょ。」

「えぇ、いきましょうか……ふふふ。」

「も～／／／エリィさん忘れてください！！」

「ふふ、ごめんなさいね。」

慌てるノエルさんが少し可愛いと思ってしまったのは内緒よ。

エリィ　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

リリス　ｓｉｄｅ

すこし遅れてしまっていたエリィさんとノエルさんが追いつきました。
なぜかノエルさんの顔が赤い気がするのは気のせいでしょうか……

「二人ともどうしたんだ？何かあったのか？」

「すこしノエルさんと話し込んでしまったのよ、ごめんなさいね、心配させたかしら。」

「いや、なにかあったのか思っただけだから、謝る必要はないよ。」

なにもなかったようで安心しました。

……それにしても近いですね、それも……けっこうな数です。

「みなさん気をつけてください、魔獣です。」

「気づいていたんだね、けっこうな数……かな。」

ワジさんも気づいていたようですね。

「はい、多いですね。……来ました！」

「！これは……」

「多いわね……」

「でも……やるしかありませんね。」

「そうだな、リリスは下がっていてくれ。」

「そうね、リリスちゃんは下がっててて。」

えっと……私も戦えるのですが……今はお言葉に甘えましょうか。
みなさんがピンチになったら助太刀しましょう。

「わかりました、みなさん気を付けてください。」

「ああ！よし、みんな！一気にいくぞ！！」

「ええ！」

「はい！」

「了解。」

ロイドさんがみんなを鼓舞します、すごいですね、たった一言でここまでみんなの士気をあげるなんて……

「はぁ！！　せい！！」

「は！！　甘いよ。」

前衛はロイドさんとワジさんで魔獣を攻撃していますね、ロイドさんのトンファー術は大した物ですね、ワジさんの体術もすごいです……

「そこ！！　やぁ！！」

「はぁ！！　そこです！！」

後衛はエリィさんとノエルさんですね、エリィさんは射撃とアーツを組み合わせた戦いです、アーツの威力ももちろんですが射撃の腕も大したものです。
ノエルさんも射撃の腕は負けていませんね、さすがは警備隊期待の人ですね。

「しかし……数が多いですね、向こうの魔物もこっちに気づいたようですね。」

さしずめチェインバトルってやつですね。

「くっ！数が多いな……エリィ！いけるか？」

「えぇ、いつでもいいわよ！」

うん？あれは……

「ふん！！はぁ！！せい！！」

ロイドさんがまず魔獣の集団に３連撃を打ち込み一歩飛び退きましたね。

「「スターブラスト！！」」

すごいです……敵の集団が半分減りました……ですがまだ来ますね、助太刀しましょうか。

「はぁ……はぁ……まだいるのか……」

「え……えぇ……あと少しなのだけど。」

「これは……すこしきついかもしれませんね。」

「そのようだね（あれを使うかな……）」

「みなさんあとは私にまかせてください。」

「え？リリスは戦えるのか？」

「はい、私も戦えると言おうとしたのですがみなさんのお言葉に甘えさせていただきました。」

「そ、そうだったの……でもけっこうな数よ？」

「問題ありませんよ、私は大丈夫です。」

そうです、あの程度の数では私の障害にはなりえません。

「行きます……シュン！」

「な！？消えた？」

「一体どこに……」

「あ！上です！」

私は瞬動を使い魔獣の群れの上へと移動します、見慣れてない人には私は瞬間移動したように見えるでしょうね。

「三の舞……雪月花！！」

私は最初に一番力のありそうな魔獣を上空からの一閃で倒します。そして残りは的確に急所を狙い切り伏せます。

「き……きれい……」

「あ……あぁ……踊っているようだな……」

「何かの舞台を見ている感じです……」

「そうだね、本当にきれいだよ……（一本の刀を使い舞を踊るかのような斬撃……まさかね……）」

みなさんが茫然としていますね、あと一体ですか。

「これで……ラストです！」

ーーシュンーー

リリスの一閃を受けた魔獣は力なく倒れた。

「ふう、終わりましたね……うん？みなさんどうしたんですか？？」

みなさんがハッと我に返ったようにこちらに来ます。

「い……いや、ちょっと目を奪われたっていうか。」

「えぇ……戦いとは思えないほどにきれいな戦い方だったわ……」

「はい……舞を踊っているような感じですごかったですね。」

「僕もすこし驚いたよ、本当にきれいだった。」

自分の戦い方をきれいと言ってくれたのは彼らで2番目ですね、アリアさんやエンネアさんにも言われました。

「ふふ、ありがとうございますみなさん。」

「それにしてもリリスはすごく強いんだな、驚いたよ。」

「そうね、本当にすごいわリリスちゃん。」

「あまり褒めないでください、私はまだまだです。
私に戦いを教えてくれた人にはまだ及びませんから。」

「リリスさんに戦いを教えてくれた人……ですか、とても強そうです……」

「はい、とても強いです。その人は私の憧れであり目標ですから。」

超えられるかはわかりませんがアリアさんは私の目標です。
どれだけの時間がかかるかはわかりませんがいつかは必ず超えて見せます！！

「っと話し込んでいたらもうバス停だな。」

「そうですね、みなさんとはここまです。」

「もうすこし話していたかったけど残念ね、また会いましょうね。リリスちゃん。」

「はい、エリィさんもみなさんもまた会いましょう、それではお気をつけて。」

「またね。」

「またな。」

「ぜひまたお会いしましょう。」

「フフ、また。」

そうしてみなさんは動力車に乗ってマインツトンネルのほうへ行きました。

「……みなさん、本当に気を付けてください、なにか嫌な予感がしますから。」

このリリスの予感は見事に当たることになるのは原作を知っている

人ならわかるはず！！

リリス side end

オリ主設定２

リリス・プラティエ

レベル７０

†装備†

武器　炎舞の刀（ＳＴＲ＋３３０　ＲＮＧ＋１　戦闘不能２０％）
　ルシフェリオン（ＡＴＳ＋４５０　小型の球体、ネックレスのような形でリリスの首元に付いている、リリスの意思で魔道杖のように変化することができる。）

身体　深紅のジャケット（ＤＥＦ＋３００　ＡＤＦ＋５０　回避率＋２０％　女性専用装備）

靴　紅のブーツ（ＤＥＦ＋１５０　ＭＯＶ＋２　回避率＋２０％　女性専用装備）

アクセサリー　超・闘魂ベルト（一人の行動が終わるたびにＣＰ増加）
　グラールロケット（全状態以上無効）

†クオーツ†

マスタークオーツ　セツナ（戦闘開始時とピンチ時にＳＴＲとＳＰＤ増加　風属性）

クオーツ　行動力２　攻撃２　省ＥＰ２　回避２　ＥＰ２　混乱の刃

†クラフト†

一の舞・夜桜　３０　大円　一瞬で敵の背後に回り静かな、しかし強力な一閃を放つ。確率５０％で「戦闘不能」に

二の舞・雪花　２０　単体　無数に敵を切りつけすべての斬撃は的確に敵の急所を切り裂く。技／アーツ駆動解除

三の舞・雪月花　３０　中円　目にも止まらぬ速さで敵の頭上に飛び、強力な一撃の斬撃を繰り出す。行動順を遅らせる。

真・麒麟功　３０　自己　体内の気を瞬時に練り上げ、一定ターンＳＴＲとＳＰＤを急激に上昇させる。

月下の洗礼　５０　中円　ＣＰ＋５０

四の舞・死の演舞　４０　単体　敵を死へと誘う剣の舞。確率９０％で「戦闘不能」に

†Ｓクラフト†

終の舞・桜花乱舞殺　全体　攻撃　閃光の如く目で追うことのでき

ない剣技、全体の敵を無数に切り付け敵を薙ぎ払う。確率８０％で
「戦闘不能」に
ルシフェリオン・ブレイカー　直線　攻撃　広大な魔法陣を展開し
打ち出す収束砲、前方の敵をすべて一掃する。

ルシフェリオンはやってしまった感があります、まあティオも似た
ような技あるしなんとかなるでしょ（笑）
もともとリリスは某魔法少女の星光の殲滅者をモデルとしているの
でこの技はぜひ入れたかったんですよね……
賛否あるとは思いますがまあ……勘弁してください、あぁこんなク
ラフトもあるんだな～ってな感じで見てください・ｗ・

１０話「儚い笑みを浮かべる少女」

リリスはロイドたちと別れた後バスに乗りクロスベル市へと帰ってきた。

「ようやく帰ってきましたクロスベル市です。」

１日ぶりに帰ってきたクロスベル市を見てリリスはつぶやく。

零の至宝の少女との出会い、そして少女を守る特務支援課との出会い、赤い星座との邂逅、かつて１時期ではあるが自分を助けてくれたヨルグマイスターとの再会、蛇の使徒と執行者との思わぬ再会、今まであまり人と関わることをしなかったリリスにとっては非常に濃い１日だったのは言うまでもない。

「ほんとにいろいろあった１日でした……うん？あれは……」

彼女の前から身なりのいい３人組が歩いてきた。

「たく、自治州の警察如きが俺たちに説教とは舐めた真似をしてくれたな！」

「しょうがないさユーリ。だけど所詮あいつらには説教が精一杯なのさ。」

「そうだな、俺たちを裁くことはできないんだ、そこまで怒るなよユーリ。」

「（なるほど、彼らは共和国の人ですか……）」

現在クロスベルでは外国の人を裁くことはできないのだ。
だから警察も迂闊に逮捕することはできない、なんとも世知辛い世の中である。

「ほんとですね、規制が変わるようにディーター市長にはがんばってもらいたいものです。」

なんの文に反応したのかはわからないがそれはスルーするとしよう。

「はい、それは気にしてはいけませんよ。」

うん……スルーだだスルー……

「さてと、歓楽街ですか……」

住宅街を抜けリリスが訪れたのは歓楽街、アルカンシェルを見るとロイドとヨルグの言葉が頭をかける。

「（早いうちに会った方がいい……ですか）」

リリスは今すぐにでも最愛の姉に会いたい、しかしまだ心の準備が足りていないのだ。
姉と別れたのは8年、もしかしたら自分のことがわからないかもしれない、ひょっとしたらすでに自分のことは忘れているかもしれない。リリスにとってただそれが怖かった。

「（はぁ……まだなぜいなくなったのかと怒られるほうが気が楽……ですね……）」

リリスの頭の中はすでに姉との再会したときのビジョンで一杯である。
だからだろうか、考え事をしていたので気づかなかった。自分に近づく1つの影に……

ーードンーー

「きゃっ！」

「え？……あ、ごめんなさい！。」

非常にレアである、リリスがこんな可愛らしい悲鳴をあげるのは今後ないかもしれない。

「えっと、大丈夫です、ボーっとしてた私が悪いんです。」

「それは私も同じだから、こちらこそごめんなさい。」

両方とも頭を下げる光景とはなんだろうか、これでは埒があかないと思いリリスが口を開く。

「ふふ、これでは話しが進みませんよ。」

「あはは、そうだね、でも本当にごめんなさい。」

「もういいですよ、あなたは別ｎ……ってあなたは……リーシャ・マオ？」

リリスが今ぶつかったのはクロスベルでは最早有名である。

アルカンシェルで電撃デビューを果たした期待の新人リーシャ・マオその人なのだ。

「うん、そうだよ。あなたの名前も聞いていいかな？」

「私はリリスです、よろしくお願いしますね。リーシャさん。」

「こちらこそよろしくねリリスさん、ていうか呼び捨てでいいよ？そんなに年も変わらないと思うし……？」

「私も呼び捨てでいいです。私は１７ですけど……リーシャは？」

「わかった、でもすごい偶然かな、私も１７だよ。」

「同い年……ですか……」

「うん？どうかしたの？」

「いえ……（これで同い年なんて不公平ではありませんか？）」

リリスがなぜこんなことを思っているのか、それはゲームをやった

ものならわかるはずである。

「ただ……ずいぶんと立派なものをお持ちなのだなと……決して大きくて羨ましいなと思ったわけではありませんよ？はい。」

いや、本音ダダ漏れである……

「あはは……でもいいもんじゃないよ？肩なんてすぐ凝って痛くなるし……」

「それは私たちにとっては贅沢な悩みですね……」

「あはは……ごめんね……そうだ！こうして出会えたのも何かの縁だしそこのアイス屋でなにか食べない？」

そういってリーシャが指差したのはアルカンシェル前に構えてあるアイスの露店である。

「いいですね、ここのアイスはおいしいと聞いたことがあります。」

「ふふ、それじゃさっそくいきましょ。」

そうして二人はアイスを買って食べた後雑談に花を咲かせていた。

「そうだったの……8年ぶりにクロスベルにね。」

「はい、いい時期に帰ってこれたと思ってますよ、たくさんの人たちに出会えましたし、何よりリーシャにも会えましたからね。」

そういってリリスは満面の笑みでリーシャに言う。

「／／／そ、そうなんだ、私もリリスに会えてうれしいよ。」

リーシャもリリスに笑顔で返す、だがリリスは違和感を覚えた。
彼女の浮かべた笑顔が無理のあるように見えたのだ、この違和感はよほど感のいい人（ロイド）かリリスくらいしかわからないだろう。
なぜリリスがわかるのか、簡単なことである。それは8年前にリリスが最愛の姉へと向けていた同じ“儚い”笑顔なのだから。

「リーシャ……1つ聞いてもいいですか？」

「うん？なにかな？」

「リーシャはどうして……そんな儚い笑顔をするんですか？」

「……えっ？」

リリスは問うた、リーシャの顔が驚きに染まる。

「あなたのその笑顔は無理をして笑っているように私は感じました……違いますか？」

リリスは真剣な面持ちでリーシャに問いかける、リーシャも何の冗談かと思ったがあまりにも真剣な顔のリリスを見てその笑みを消して口を開く。

「どうして……どうしてそう思うの？」

リーシャは素直な疑問を口にする。

「簡単なことです、その笑みは８年前に……私が大好きな姉さんの元を離れるときに浮かべていた笑顔ですから……」

リリスはそう言って笑みを浮かべる、まるで過去の自分に問いかけるように。

「お姉さんの元を……？」

「はい、だから思ったんです、あなたの笑みの違和感に。」

「そう……だったんだ……」

リリスとリーシャは直感的に感じただろう。“私たちは似ている”と。
だからこそリリスはリーシャの力になりたいと思い彼女に聞く。

「私に……話してはくれませんか？
まだ知り合って時間は経っていませんが……私はリーシャの力になりたいんです。」

「どうして……そこまで私にしてくれるの……？」

リーシャの疑問は当然である、どうして今知り合ったばかりの他人にここまでしてくれるのかわからなかった。

「リーシャはきっと……イリア・プラティエに救われたのでしょう？」

「っ！？」

リーシャは驚いた、まさかそこまで自分のことを言い当てられるとは思わなかったからだ。

「当たり……ですね。」

「でも……それは理由にならないよ、イリアさんに救われたことが。リリスが私の力になりたいということにはならないはず！」

「いえ、なりますよ。なぜなら私もイリア・プラティエに……“姉さん”に救われたのですから。」

「リリスもイリアさんに？……姉さん……？」

「はい、改めて名乗ります。
私の名前はリリス、リリス・プラティエです。イリア・プラティエの……妹です。」

１０話「儚い笑みを浮かべる少女」（後書き）

リーシャは敬語がメインな気がしたけどリリス相手には砕けた話し方にしてみました。
ロイドの見せ場をリリスにとられたのはやってしまった感がないわけではない……
５章でリーシャを仲間にするときはリリスメインで行きたいと思ってます。
終章をなぜ５章というのかというと、ぶっちゃけそれで終わらすつもりはないです、オリジナルの章を入れてそれを終章にしようかと思います。
もちろんメインはリリスで進んでいきますのでお楽しみに！！

11話「リリスとリーシャ」

「リリス、リリス・プラティエです……イリア・プラティエの妹です。」

「イリアさんの……妹……？」

リーシャは驚いたであろう、イリアに妹がいたという話しを聞いたことがなかったからだ。
だが不思議とそれが嘘とは思わなかった、心当たりがあったのだ。

「ふふ、いきなりこんなこと言われても信じられませんよね？」

リリスが力のない笑みで言う、しかし返ってきた言葉はリリスには予想だにしないものだった。

「いいえ、信じるよ。」

「えっ？」

おそらくイリアは誰にもリリスのことを言ってないだろう、故にアルカンシェルの中でも知ってる人はいない、ならばなぜリーシャは

信じてくれるのか。リリスはそれが気になり聞いた。

「……どうして……信じてくれるんですか？」

「うん、イリアさんはいつも舞台の練習は真剣そのもの。見に来てくれるお客さんたちを満足させられるように絶対に手を抜かないんだ。」

「……昔から変わってないですね、姉さんは……」

「うん……でもね、いつも練習が終わったあとよく一人で夜空を見てるんだ……すこし悲しそうな表情で。」

「夜空を……ですか……」

リリスは昔から夜空を眺めるのが好きだった、それはイリアも同じこと。
昔、リリスがまだイリアの元にいたときはよく二人で夜空を眺めながら話しをするのが日課だった。
リリスにとっても、イリアにとってもそれはかけがえのない時間だったのだ。

「それでね……ある時私は聞いたの、イリアさんが夜空に向かって

……誰かの名前を呟いたのを。」

「っ？」

リリスの心臓が素早く鼓動する。

「リリスの名前を聞いたとき……何かが引っかかってたの、どこかで聞いたことある名前だって。」

「……それは……」

「うん、その時イリアさんが呟いた子の名前は……リリス、あなたの名前だよ。」

「……あ……ぁ……」

リリスは気づけば涙を流していた、姉は自分のことをまだ覚えていてくれたことが嬉しかった。
そしてそれと同時に、自分が知らぬ間に姉を苦しめてしまっていたことが許せなかった。
今のリリスにあるのは嬉しさと後悔が半々といったところか。

「……姉さんは……姉さんはまだ私を……覚えていてくれたんですね……」

「うん、そして今もきっと……リリスに会いたいと思ってるよ。」

「そう……ですね、どうやら心の問えはとれたようです。
リーシャ、ありがとうございます。あなたのおかげで私は前に進めそうです。」

そういって微笑んだリリスの顔はもはや偽りの笑顔ではなかった。
そこにあったのは正真正銘リリスの心からの笑顔だった、それにつられリーシャも笑顔になる。

「あ……」

「うん？どうしたの？」

「いえ、今のリーシャの笑顔、違和感がありませんでした。
やっと見せてくれましたね、あなたの本当の笑顔を。」

リリスは今まで見れなかったリーシャの本当の笑みを見て言った。

「……ふふ……リリスには本当に敵わないよ、うん……こんなふうに心から笑ったのは久しぶりかもしれない。」

「そうですか、……ねぇリーシャ……私はあなたに会えてよかったと心から思います。」

「どうしたのいきなり……」

「私は今あなたに救われた気がします、だから……リーシャのことも……聞かせてはくれませんか？」

リリスは確かに今この場でリーシャに救われた、それはリリスの嘘偽りない思いである。
もしリーシャの話しを聞かなかったら過去を吹っ切れなかっただろうから。

「……うん……私のこと……聞いてくれるかな？
不思議だけど、リリスには聞いてほしいと思ってる自分がいるの。
私が今まで誰にも話すことができなかったことを……」

リーシャにあるのは不安だけなのかもしれない。
今から話すことは彼女が誰にも話したことがないことだからだ。
リリスはおそらくリーシャのその気持ちを直感的に感じた、だからリリスは優しい口調でリーシャに問いかける。

「聞かせててください、リーシャのことを。さっきも言いましたけど、私はリーシャの力になりたいんです。」

「ふふ、ありがとうリリス。
そうだね、まずは……リリスは≪銀≫を知ってる？」

「はい、たしか東方人街伝説の暗殺者と言われている人ですよね？」

リリスの言った通り≪銀≫は東方人街伝説の凶手として恐れられている人物である。
その正体は不死身だの不老不死だの言われているが詳しく知っているものはいない。

「うん、リリスの言うとおり……そして……」

リーシャは一呼吸置いて言う。

「銀の正体は……“私”なの。」

リリスは目を見開く、銀は裏の世界ではとても有名だ、その人物が目の前の少女だというのだから驚くのは必然である。

「そう……でしたか……リーシャがあの……」

「うん、やっぱり驚いちゃったかな。」

「はい、でも不思議とそこまで驚きはしませんでした。なぜかはわかりませんが。」

たしかにリリスは目を見開いて驚いた、しかしそこまで驚愕なことではなかったのだ、リリスの中では。

「ふふ……あ、月……」

「そうですね、暗くなったのに気付かなかったなんて……」

二人はかなり話し込んだのだろう、すでに時計は１８時になるといったところだ。

「きれいな満月ですね……そういえばリーシャは≪月の姫≫を演じていたんですよね？これもリーシャの力でしょうか。」

リリスは笑いながら言う。

「ふふ……
月は、光にして影……
多分それは、私という存在が月に似ているからだと思うの。」

リーシャはも笑いながら話す、リーシャの話しは続く。

「本来は陽のあたる場所に出てくるはずのなかった存在……」

「でもリーシャは、姉さんに出会って光を掴むことができたはずです……それは確かでしょう？」

「うん、イリアさんに出会い私は変わることができた、これは否定しないよ。
だけど私は……私という存在を作った流れは深く底知れないものがある。
≪銀≫という一子相伝の流れ……父から受け継いだ密やかな道は。」

「なるほど……≪銀≫は家系のようなものだったのですね、だから不死身とも不老不死とも言われた。正体を知らなければそう言われても不思議ではありませんね。」

リリスは一つの≪銀≫についての謎が解けた、不老不死や不死身と言われていればどんな秘密があるのかと思ったが家系で受け継がれているというのなら納得である。

「リーシャが≪銀≫ということはわかりました……よろしければ……クロスベルに来るまでのあなたのことを聞かせてはくれませんか？私の知らない、リーシャ・マオを。」

リリスの問いにリーシャは迷わずに答える。

「うん。」

リリスは瞳を閉じて……ゆっくりと語り出す。

「気づいた時には私は父と共に在った。」

・

・

・

・

・

「母の記憶はないかな。

多分、≪銀≫の道を私に受け継がせるために父が遠ざけたのだと思うの。」

「だけど私にとってはそれが普通で……過酷な鍛錬も、暗器や符術の修練も淡々とこなしていただけだった。
各地を転々としながら、日曜学校に通い、人と接する術もそこで得た。」

「父は厳しくもなく優しくもなく、ただひたすら教えるだけ……それというのも、≪銀≫として受け継ぐことが膨大すぎたからかな。
それは代々の≪銀≫の記憶……どのような状況でどんな工作を行い、どんな標的をどのように仕留めたか……時代を通して同じ存在であるため、その全てのあらましを受け継ぐ必要があったの。」

「全てを受け継いだ時……私は≪銀≫そのものになった。
といっても、父が存命である限りは≪銀≫になることはないよ。
≪銀≫はただ一人……それは変わることがないから。
しばらくの間、父の帰りを待ちながら穏やかに過ごす日々が続いた。
そして、父が帰ってきたらいつ≪銀≫を継いでも問題ないように仕事のあらましを教えてもらう……」

「既に表の顔は持っていたけれどそれが私にとっては世界の全てだった。」

「その世界が崩れたのは父が不治の病に倒れてから……代々の≪銀≫の中でも卓越した力を持った父だったけど……病魔からは逃れられなかった。
さりとて抗うこともせず、延命のための手術も受けず……ある日私を呼んでこう言ったの。

自分を殺して≪銀≫を継ぐようにと。」

「できなかった。
およそ、父の言うことに逆らうことのなかった私だけどそれだけは何故かで出来なかった。
……私は初めて恐くなった。
あれだけ父が丹念に仕上げた≪私≫が出来損ないだったのではないかと。
死にゆく父を失望させたのではないかと。
……懊悩する私に父はふと苦笑して言ったんだ。
『それもまたお前だ』『お前の銀はお前が決めるがいい』……そして一月後、父は亡くなった。」

「そして私は≪銀≫になった。
父の持っていたコネクションを継ぎ、黒衣と内功で体系を誤魔化し……父の腕には及ばなかったけど滞りなく仕事を再開できた。
『お前の銀はお前が決めるがいい』
父の言葉の意味もわからぬまままただ淡々と流されるようにして……」

「そして2年が過ぎ、私は黒月と長期契約を結んだ。
カルバードの西端……貿易都市クロスベルの覇権奪取に協力するという契約を。」

「クロスベルに到着した私は戦いに備え、街の下見をする最中、歓楽街でとある劇場に入った。
そこでは丁度、公開練習というものが行われていて……そこから先

はリリスの知っている通りかな。」

・・・・・・

「……そうでしたか……その時に姉さんに目を付けられたというわけですね。」

「ふふ、最初は理由をつけて何とか入団を断ろうとしたんだけど……でもイリアさんは凄く強引で……とうとう根負けして入ることになったの。」

「（ふふ、姉さんもほんとに相変わらずですね）」

「体力と偽装には自信があったから、いい隠れ家になると思ったかな。

……予想以上に練習がハードで≪銀≫との両立が大変だったよ。」

「ふふ……ありがとうございます、リーシャ。聞かせてくれて嬉しかったです。」

リリスは嬉しかった、自分のことを信頼してここまで話してくれたのだから。

「ふふ、聞いていて面白い話ではなかったと思うけど……
でもこれが……父と祖先から私に受け継がれた“道”……アルカンシェルという光を手に入れたとしても……その“道”を完全に捨てることは多分に私には出来ないと思う。」

「そうですか……」

リリスは何かを思うようにリーシャに言う。

「お前の銀はお前が決めるがいい」

「……え……」

「……≪銀≫は全てを受け継ぐ。」

リリスの言葉は続く。

「アルカンシェルという光をあなたが見出してしまった以上……
≪銀≫もまた、光という側面を受け入れざるを得ないのではないでしょうか？」

「そ、それは……」

「どんなものも時代が変われば在り方も変わります……いえ、変わらざるを得ないんですよ。
そうやって人の歴史は受け継がれ、前に進んでいきます。
おそらく、そういったことも含めてお父様は言いたかったのではないでしょうか？」

「……」

「あなたの行為が許されることではないのかも知れませんが……
それでもあなたは、あなたの≪銀≫を目指せばいいと思いますよ。
あるいはここで≪銀≫という存在を完全に断ち切るというのも一つの道かもしれません。
そうなったとしても多分ですが、お父様は気にしないのではないでしょうか？」

リリスは最高の笑みでリーシャに言う。

「『それもお前だ』って笑って。」

「……ぁ……」

「……いいお父様ではないですか。
普通の家族とはすこし違いますがちゃんとリーシャを愛していた……私はそんな風に思います。」

「……お父……さん……」

リリスの言葉がリーシャの心に染み渡る。

「どう……して……
お父さんが亡くなった時も……こんな……
……涙なんて……ぜんぜん零れなかったのに……」

リーシャの目から涙が零れる、ようやく何かから解放されたように。

「多分ですけど、姉さんたちとの日々であなたは変わったのだと思います。
これから先、あなたがどんな道を進むか分かりませんが……私でよければ、お父様の代わりにあなたのことを見守らせてください。
光を掴んだあなたが、どう変わっていくのかが見たいですから。
あ！もちろん私のことも見てほしいです、私ももう、迷いませんから！」

リリスの眼は強い輝きを持っていた、もう迷わない。
姉さんも守って見せるし、何よりリーシャのことも見守っていく。

リリスのそんな思いがリーシャを包む。

ーーギュッーー

「リ……リリス……」

「あなたはもう一人じゃありません。
姉さんもいるし私だっています、必要があるなら頼ってください。
必ず……力になりますから。」

リーシャのリリスを抱きしめる腕に力が入る。

「リリス、少し胸を借りていいかな？」

「どうぞ、リーシャがスッキリするまでずっとこうしていますから。
」

「ありがとう……リリス……」

今このときリリスとリーシャは本当に心の通った親友へとなった。

いや、もしかしたら二人は親友以上の……固い絆で結ばれたのかもしれない。

11話「リリスとリーシャ」（後書き）

ふう、長かった……
ほぼ終章のロイドのセリフをとりましたがいかがでしたでしょうか。

このまま行くとリーシャはイリアの元を離れないんじゃね？とか思うかもしれませんがすでに構造は決まっておりますので期待してててください。
というか原作崩壊するかもしれないですけど……まあちょっとだけ変わるかな。

あとなんかガールズラブぽい終わりになってしまいましたがそんなことはありません。二人は親友です、ただほかの人より仲が良すぎる感じですが・・・・・・」

12話「姉妹」

歓楽街のベンチに座っている2人がいた。

「ねぇリリス、決心はついた？」

銀としての過去を話した少女、リーシャ・マオと。

「はい、もう大丈夫です。ありがとうございます、リーシャ。」

おなじみ我らが主人公リリス・プラティエである。

「ふふ、どういたしまして。
たぶん今の時間帯だと練習は終わったくらいかな。」

「もうすぐ夕食時だというのにがんばりますね。」

「そうだね、もうすぐ各国の要人が集まるゼムリア通商会議があるからね。
アルカンシェルはその要人たちを招いて講演をするからイリアさんも気合が入ってるんだと思う。」

「なるほど、それは気合が入るに決まってますね。
おそらくその人たちも姉さんなら骨抜きにしてしまうでしょうね、
もちろんリーシャの演技もですけど。」

「ふふ、でも私はまだまだだけどイリアさんならそうなってもおかしくないかな。」

2人してイリア・プラティエを絶賛しまくりである。

「しかし……ゼムリア通商会議ですか、おそらく赤い星座が動きますね。黒月もでしょうけど。」

「そうだね……私もたぶん≪銀≫として黒月に協力しないとだから……」

そうなのだ、リーシャは黒月と契約を結んでいるため赤い星座などが動き黒月も動くことになれば否応なくリーシャも戦うことになる。
そこでリリスは気になることができたので聞く。

「でもそれだと公演はどうするのですか？」

「あぁそれは大丈夫だよ、講演のある日は≪銀≫の仕事は空けてあ

るから。」

「なるほど……でもそれだといい方は悪いかもしれませんけどバレる可能性が高いのではないですか？もしかしたらすでに黒月の幹部あたりなら気づいていてもおかしくありません。」

リリスの言うことは正しい、もし≪銀≫が仕事を断る日がアルカンシェルの公演日とかぶっていることが知られてしまえば確実にアルカンシェルの関係者だとわかってしまう。
なにより恐ろしいのは正体をネタに何をされるかわからないことだ。

「うん……たぶんだけど……ツァオさん……黒月の人なんだけどね、その人はたぶん私の正体に気づいてると思う……」

「そうですか……もしリーシャの正体を餌に脅しでもしてくるものなら私は黙っていませんよ。ＯＨＡＮＡＳＨＩしなければいけませんね……」

「ふふ、リリスがその気になったら黒月も簡単に黙っちゃいそうだね。」

二人そろってそんな会話をする、暗い話題はどこへやらである。

「さて、そろそろ行こうリリス。」

「はい、ドキドキしますね。」

二人はアルカンシェルの扉をくぐり中へと入っていった。

リリス　ｓｉｄｅ

受付のほうも変わってないですね、懐かしいです。

「……誰もいないですね。」

受付のほうにはいつも誰かいた気がするのですが今はいませんね。

「きっと舞台のほうかな、講演に向けて団長さんといろいろ話してるんだと思う。」

「そうですか……この扉の向こうに姉さんがいるんですね……」

「そうだよ、イリアさんきっとすごく驚くと思うな。」

うぅ〜〜、すごく緊張します。
怒られてしまうでしょうか、８年も離れていましたし……あぅ〜〜〜。

「……」

「リリス？」

「はっ！すみません、すこし思考の海に落ちてたようです。」

いけません、しっかりしないと。久しぶりに姉さんに会えるんですから！！

「ふふ、大丈夫。私も傍にいるからね。」

「ありがとうリーシャ……では、いきましょう。」

「うん。」

ーーガチャーー

そして私は舞台への扉を開けて足を踏み入れた。

リリス　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

イリア　ｓｉｄｅ

こんばんわ、イリアよ。
私は今公演に向けて団長達と打ち合わせをしているわ。

「もうすこしここを大きく見せたいのだけどどうかしら？」

「ふむ、できなくはないかもしれないが……間に合うかね。」

「大丈夫よ、私がしっかり見るからいけるわきっと。」

「すごい自信だよな、でもなぜか実現できそうだと思えるところがすごいところかな。」

「できそうじゃないの、やるのよシュリ。」

「わかってるよ。」

そうよ、みんながんばってくれるからきっといいものができるはず。

今までのどの講演をも超える最高の舞台が。

そういって私が指示を出そうとしたとき入口の扉が開いた。

ーーガチャーー

入ってきたのはリーシャと……フードをかぶっていて顔が見えないけど誰かしら……

「リーシャ姉どうしたんだ？今日はリーシャ姉の練習は終わったはずだけど。」

「そうだな、リーシャ君どうしたんだね？それにその子は……」

やっぱりあの後ろの子が気になるのね、ほんとに誰かしら……でも妙な感覚ね、本能的にあの子のことを知ってる気がするわ。

「はい、特に用事はないんですけど。
彼女がイリアさんに用があるんです、話しを聞いてあげてくれませんか？」

私に？ファンかしら……そうね、話しを聞くくらいならいいかしらね。

「わかったわ……それで、私に用ってなにかしら？」

「……」

喋らないわね……人見知りするタイプなのかしら……

「ほら、大丈夫だから。しっかり！」

リーシャがフードの子に小声でなにか言ってるわね、ほんとに誰なのかしら……
……あら、ようやく喋る気になったみたいね。

「……あ……あの！……」

えっ？今の声……忘れるわけがない、８年前と変わらぬ声……も

しかしてこの子は！

イリア　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

リリス　ｓｉｄｅ

「……あ……あの！……」

声が出ないです……緊張しすぎて……どうしましょう、とりあえずなにか言わないと……

私が声を出そうとしたとき先に沈黙を破ったのは姉さんでした。

「リリス……」

「えっ？」

「リリス……なの……？」

あ、ダメですもうダメです、名前を呼ばれただけで涙が出てきました。

うまく喋れないですよもう……

「……う……うぁ……」

「ねぇ、顔を見せてくれないかしら。あなたの顔を私に見せて。」

もう私は迷わなかった、そう言われた瞬間自分がかぶっていたフードを取った。

「あ……あぁ……」

ダメですよ姉さん、姉さんが泣いたら私……止まらなくなっちゃいますよ……

「ねえ……さん……わた……し……」

私が喋ろうとした瞬間……

「リリス！！」

ーーガバッーー

「……あ……」

私は抱きしめられていた。

リリス side end

１２話「姉妹」（後書き）

短いです、次でイリアとリリスの甘々空間を作ります。

それとプロローグで名前しか出なかったあの人も出ます。

お楽しみに！！

13話「はしゃぐ姉と戸惑う妹」

リリス　side

「あの、姉さん？」

「な～に？リリス。」

「どうして私は先ほどからずっと姉さんの膝の上に座っているのでしょうか・・・」

そう、今私は姉さんが住んでいるマンションの部屋で姉さんの膝の上にいる。
周りにはリーシャとシュリ、そして私のもう一人の姉な存在のセシルさんがいる。
みんなに視線を移すがみんな苦笑するだけ……私を助けてくれるものはいないのですか！！

……対する姉さんはというと……

「そんなの決まってるじゃない！！リリスが可愛いからよ！！」

「／／／ね、姉さん。恥ずかしいですよ……」

「恥ずかしがってるリリスも可愛いわ。」

「／／／う～～、セシルさん～～」

「ごめんね、リリスちゃん。今のイリアは誰にも止められないわ……」

「そんな～～～、シュリ！リーシャ！」

「リーシャ姉このお皿どうしようか？」

「えっとね、奥から順に並べてくれる？」

「わかった。」

「なっ！？華麗に無視！？助けてくださいよ～～～」

ほんとに誰か助けてください！あまりの恥ずかしさに頭がおかしくなってしまいそうです……。

「リリス～～～～♪」

「ふにゃ～～～～～～～～／／／」

もう、もう限界です……

リリス　side　end

リーシャ　side

リリスがイリアさんに抱きしめられて顔を真っ赤にしてる、あ！悲鳴が……

「リーシャ姉、リリス姉は大丈夫なの？」

「あはは……きっと大丈夫だと思うよ、それよりもご飯の準備しちゃおう。シュリちゃん。」

「うん。」

リリスがイリアさんと再会した後は大変だった。
何が大変かって二人とも30分くらいずっと抱き合ったまま泣いてて慰めるのが大変だった。

そのあと泣き止んだイリアさんが団長とほかのメンバーにリリスのことを紹介。
イリアさんはリリスのことを止め処なく話すのでみんな顔が引きつってたのは秘密ね。
まあ8年ぶりに再会できたんだからしょうがないのかも知れないけど……リリス、ずっと顔真っ赤にしてたね。たしかにあんな紹介されたら誰でも恥ずかしいよ……あまりに恥ずかしすぎて内容は言えないけど……。

そしてイリアさんの部屋に私とシュリちゃん、イリアさんにリリスで来た後にすぐイリアさんはどこかに電話をかけて……少ししたら汗を額に浮かべたセシルさんがやってきた。どうやらイリアさんとセシルさん、そしてリリスは昔によく3人で遊んだそうだ。

リリスに聞いたらセシルさんにはもう一人の姉のようによくしてもらったらしい。
セシルさんが来てからが一番大変だった。
イリアさんもセシルさんも両方リリスを自分の膝の上に座らせたがってそれが原因で喧嘩になった。
私はそのときこれは大変なことになったと思い焦ったけどすぐ治まった。簡単なことだ。

リリスが目に涙を貯めさらに上目使いで二人に『お願いです、喧嘩しないでください。』これだけで騒動は治まった……
余談だけどリリス以外の私たちはそのリリスの顔を見たときみんな同じことを思った。「なにこの可愛い生物」と。

そんなこんなで今はみんなでご飯を食べている。

「でもなんか信じられないな、リリス姉が姉な感じがするよ。」

「ちょっとシュリ、それはどういう意味かしら？」

さて、なぜシュリちゃんがリリスのことリリス姉と呼んでいるかというと二人はちょっと話してすぐ仲良くなったからだ。二人ともいい友達ができたと喜んでたっけ。

「ふふ、でも私は今幸せです。またこんな楽しい生活が送れるなんて……」

ふとリリスがこんなことを言った。

「なにを言ってるのよ、これからずっと送るのよ？この生活を。」

「姉さん、またお世話になってもいいですか？」

「そんなの当たり前、あなたは私の可愛い妹なんだから。」

「／／／ありがとうございます、姉さん。」

「ふふ、ほらリリス、あ～ん。」

「あ、あ～ん。」

ーーパクッーー

「おいしいです。」

「もうほんとに可愛いわリリス～。」

「ちょ／／／姉さん！！」

……甘々な空間……リリスが可愛いと思ってしまったのは秘密

だからね。

リーシャ　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

リリス　ｓｉｄｅ

「ふう、大変な目にあいました……」

「ふふ、災難だったわねリリスちゃん。」

「あ、セシルさん。」

セシルさんと会えたのも嬉しかったですね。
昔と同じですごくやさしいのは相変わらず、すべてを包み込むような温かさを持った人です。

「それにしても……よく帰ってきてくれたわね……」

「私は……帰ってきてよかったのでしょうか……」

私は不安になりそんなことを言った。

その瞬間私はセシルさんに抱きしめられた。

「セシル……さん？」

「あなたが帰ってきてくれたこと、イリアから電話をもらったときほんとかどうか疑ったわ。
でも今あなたはここにいる、それが今とても嬉しいのよ？私だけじゃなくてイリアももちろんね。」

「……はい……」

「ふふ、もう絶対に勝手にいなくなってはダメよ？もしいなくなったら怒るからね。」

「はい、もう絶対にいなくなりはしません。」

はい、もう絶対に……姉さんたちの傍からいなくなりませんよ。
また掴めたこの日常を……必ず守って見せます。

この後姉さんにセシルさんに抱きしめられたことを言ったらなぜかご立腹に。

一緒にお風呂入って寝ると言ったら機嫌が直りました……

リリス　side　end

１４話「迅雷と赤の戦鬼」

リリス　ｓｉｄｅ

久しぶりに姉さんと再会しセシルさんとリーシャ、シュリを交えてご飯を食べた後、すこし時間ができたので私は裏通りのイメルダ店を訪ねることにしました。

「相変わらず怪しさいっぱいの通りですねここは……」

それも仕方ありません、少し前まではマフィアが根城にしていた建物がありますからね。

「うん？……あれは……」

私の前に２人の男女が出てきました。
１人は昨日カジノの前で出会った女の子、シャーリィです。
もう一人は……

「なんかランディ兄弛んでたね～、今のランディ兄と戦っても楽しくなさそう。」

「フ、そう言うな。
奴には≪闘神≫を継いでもらわなければならん、戻ってくれば足りないものは俺が鍛えてやるからな。」

「あはは、そうすれば昔のあのランディ兄に戻るのかな？」

「あぁ、戻ってもらわなければ困るがな。」

まさかここでオルランド親子に遭遇するとは思いませんでした。
しかし……あれが≪赤の戦鬼≫ですか……威圧感がひしひしと伝わってきます。

「……触らぬ物になんとかです、さっさと行きましょう。」

でも思った通り……シャーリィに見つかり声を掛けられてしまいました。

「あはは……あれ？……リリス？」

……恨みますよ、運命さん。

「……昨日ぶりですね、シャーリィ。」

「うん昨日ぶり～、でもこんなとこでリリスは何してるの？」

「私はすこしそこのイメルダ店に用があって立ち寄ったんですよ。」

「ふ～ん、そうなんだ。」

私がシャーリィが話してると戦鬼のほうからなにかを感じます。
軽めですが……殺気ですね……

「……なんですか？私にはあなたに殺気を当てられる覚えはないのですが？」

「ほう、今の殺気に気づくか……シャーリィ、この娘がお前の言っていたリリスか？」

「うん、そうだよ。
どうかなお父さん、リリス……強いでしょ？」

「……あぁ、そうだな。おそらく……俺でも戦えばタダでは済まないだろう。」

過大評価しすぎ……と言いたいところですが私は負けるつもりはありません、あなた方がこのクロスベルに害するというなら私は……

「いきなりそんな評価されても困るのですが……そういえばあなたには名乗っていませんでしたね。
……リリス・プラティエです。よろしくお願いします。」

「シグムント・オルランドだ……だがお前の眼は俺を知ってると言っているようだが？」

「っ！？驚きました、そこまでわかるのですか……」

これは素直に驚きました、眼を見て相手のことがわかる……ですか。単純な人なら私でも大抵何を考えてるかはわかりますが……表情は崩してないはずなんですけれどね。

「まあ慣れのようなものだ、戦場に居続ければ嫌でもわかるようになる。」

「なるほど、さすがは最強の猟兵団≪赤い星座≫の副団長ですね。」

「フ、しかしお前の実力を認めたのは本当だ。
さすがは最強の執行者候補≪迅雷≫ということか。」

まさかここでその名を聞くことになるとは思いませんでした、やはりつながりがあるのですね。

「やはりあちらとつながりがあるのですね……」

「フ、さあな。
だが仮に奴らと知り合いでなくとも≪迅雷≫の名は有名だ、遊撃士あたりなら大抵のやつは知ってるだろう。」

そこまで有名なのは知りませんでしたね、元々迅雷の名前を付けたのは使徒の二柱です。あの人……今度あったらしっかりＯＨＡＮＡＳＨＩしないと……。

その使徒というと……

「っ！！」

「うん？どうしました？≪深淵≫」

「いえ、なんでもないわ。ただリリスのお話しというワードが聞こえただけよ……」

「……知りませんよ私は、あなたが知らないところで彼女の迷惑になることでもしたのではないのですか？」

「覚えがないけれどおそらく……そうなのかしら……たしかカンパネルラがトラウマになっていたわね……」

「そういえばそうでしたね、カンパネルラの憔悴しきった顔とリリスのスッキリした顔は今でも鮮明に覚えていますよ。」

「……一度クロスベルに行ってリリスに謝ろうかしら……」

「やめてください、これから我々は大切な計画の為に動くのですよ？」

「わかってるわよ、カンパネルラにでも伝えてもらおうかしら。」

「それがいいでしょう、ただ……」

「ただ……なんなの？」

「代わりにカンパネルラがお話しを受けるのでは？そうなると恨まれますよ？」

「……やっぱり謝りに行ったほうがいい気がするわ。」

「せめて計画の後にしてください。」

「……わかったわ……」

ひそかに怯えている使徒の二柱であった。

リリス視点へ

うん？今遠くから誰かの怯える声が聞こえた気がします……誰でしょうか。

「どうした？」

急に黙ったので気になったのかシグムントさんが聞いてきました。

「いえ、なんでもありません……一つ聞いてもいいですか？」

「……なんだ？」

「あなた方が誰かに雇われてこのクロスベルに来ているのは知っています、その仕事内容は……このクロスベルという街を壊すこと……ですか？」

「フ、悪いがそれは言えんな。」

やはりそうなりますよね、でも……

「そうですか……先ほど名乗った通り私の名はリリス・プラティエ、イリア・プラティエの妹です。」

「へぇ～、名前聞いて思ったけどやっぱりイリアの妹だったんだ。」

「えぇ。」

「ふむ、だがそれがなにかあるのか？」

「大いにあります、もし……もし姉さんや私の大切な友人たちを傷つけたら……」

そして私は一呼吸置き……

「私は……あなた方を許さない。」

「……まあ覚えておこうか、そろそろ行くぞシャーリィ。」

「う……うん。」

「ではまたな≪迅雷≫よ、次に見えるのを楽しみにしているぞ。」

「……それじゃあねリリス、また会おうよ。」

「はい、できれば会いたくはありませんがね。」

そう言って2人は暗闇の中へと消えていった。

リリス　side　end

シグムント　ｓｉｄｅ

≪迅雷≫か……よもやあそこまでとはな。

「恐れたか？シャーリィ。」

横を歩くシャーリィに俺は聞く。

「う……うん、初めて……かな。人の殺気にあそこまで恐くなったのは……」

「そうか。」

たしかにあそこまで濃い殺気を出せる者はそうそういないだろう。
シャーリィはたしかに≪赤い星座≫の部隊長で実力はあるが、まだ年もそこまで行かぬ子供だ。
恐れてもしょうがないだろうな。

「だが……戦ってみたいと思っただろう？」

こんなことを聞くのは……今さらか。

「うん！恐かったけど、シャーリィはリリスと戦いたい、それで銀とも戦いたいかな。」

「フ、そうか。どうやら今回の仕事は退屈せずに済みそうだ。」

「そうだね、早く戦いたいな～～。」

ほんとにな、ランドルフを連れ戻すついでに……≪迅雷≫、お前にも楽しませてもらおうか。

シグムント　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

１５話「特務支援課は迅雷を知る」

ロイド　ｓｉｄｅ

「ランディ、気にするなよ。」

「あぁわかってるさ、心配すんな。」

「あぁ……」

おそらく俺たちの知らないランディの過去が今ランディを苦しめているのだろう。
俺はリーダーとして何もできないのか……」

「あれは……リリスじゃないかい？」

ふとワジが前を指差して言う。

「え！？……ほんとだ、でもなんでリリスがここに？それにあれは……」

なぜリリスが今こんなとこにいるかわからない、そしてそれ以上に……

「お前らあの女の子の知り合いか？……というより……何を話しているんだ？」

「そうだね、普通の子があの人達と話すことはないはずだし……」

二人とも気になってるようだな……

「とりあえず近づいてみよう。」

「おう。」

「あぁ。」

俺たちはリリス達に近づき話が聞こえる位置まで来た。
先に口を開いたのはリリスだ。

「そうですか……先ほど名乗った通り私の名はリリス・プラティエ、イリア・プラティエの妹です。」

なっ！？イリアさんの妹だって？……聞いたことはなかったけどこれは驚いたな。

「おいおいマジかよ……イリアさんに妹がいたなんて聞いたことないぞ。」

「そうだね、これは後で彼女にいろいろと聞きたいことかな。」

「そうだな、でも……リリスが言っていた≪太陽≫のようなお姉さんってイリアさんのことだったんだな。」

「あぁそういえば言ってたね、なるほど。」

リリス達の話しは進んでいく。

「大いにあります、もし……もし姉さんや私の大切な友人たちを傷つけたら……」

空気が痛いのがわかる……これがあのリリスなのか？

「私は……あなた方を許さない。」

「「「！？」」」

リリスの静かなその声は確かに濃密な殺気を纏っていた。

「この殺気は……ほんとにあの子のなのか？」

「……だろうね、でもここまで濃厚なのも……」

やっぱり二人とも思うことは一緒か……話しが終わったな。

「ではまたな≪迅雷≫よ、次に見えるのを楽しみにしているぞ。」

迅雷？聞いたことがないな、リリスのことなのか。

「なあランディ、ワジ。≪迅雷≫って聞いたことあるか？」

「いや、俺は初耳だな。」

「……僕もないね。」

「そうか……」

二人も聞いたことがないか……

「おっと、リリスって子も行っちまうぞ？どうするんだ？」

「とりあえず行くぞ、聞きたいこともあるし……」

俺たちはリリスのもとに行った。

ロイド　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

リリス　ｓｉｄｅ

ふう、話し込みましたね。

さっさと用事と済ませて帰らないと姉さんが怒りそうです……

「イメルダ店はあｓ「リリス～！」？」

「あなた方は……ロイドさんとワジさんに……えっと……」

「俺と君は初めてだな、ランディ・オルランドだ。よろしくな。」

なるほど、赤い星座の……

「初めまして、リリス……大方さっきの話は聞いていましたね？
気配がするとは思ってましたので。」

「っ！？気づいていたのか……」

驚いていますね、まあ無理もありませんか……

「はい……改めましてリリス・プラティエです、イリア姉さんの妹です。」

「あ……あぁ……」

「ふふ、そんなに困惑しないでください。
こうして名乗ったのは理由があるのですよ。」

「理由？」

ワジさんが聞いてきました。

「ロイドさんは言ってくれましたね？早いうちに姉に会った方がいいと。」

「あぁ、マインツ山道で会った時だな。」

「私自身悩んでいたんですが、この街でできた私の大切な親友のおかげで私は姉さんに会うことができました。」

何度思い出しても忘れることはできません、リーシャにはほんとに感謝しています。

「そうか、イリアさんに妹がいたってのは驚いたけど……リリス、今幸せなんだな？」

そんなの……そんなの当たり前ですよ。

「はい、私は今とても幸せですよ。」

「そうか……それでだリリス、もう一つ聞きたいことがあるんだ。」

聞きたいこと……話からすると≪迅雷≫についてですかね。

「さっき≪迅雷≫という言葉が聞こえたんだけど……あれはリリスのことなのか？」

やっぱりですか……此度の計画に結社が関わってくるなら隠すわけにもいかないですね……

「……はい、その≪迅雷≫という名は私の……≪身喰らう蛇≫執行者としての名です。」

「「！？」」

「……」

ロイドさんとランディさんは驚いています、ワジさんは驚いていませんね……

「驚きましたか？」

「あ……あぁ……まさかここで結社の名前が出るとは思わなかったけどな。」

「そうだな、エステルちゃんたちに聞いて以来だったからなぁ。」

あの人たちに関わっていればやはり知っていますよね。

「一つ誤解のないように言っときますね、たしかに私の≪迅雷≫の名は結社での二つ名です。
ですが私はあくまで執行者候補だったというだけで結社の一員というわけではありません。」

アリアさんに誘われはしましたがそれだけです、私は結社の一員ではないのですから。

「そうだったのか……」

「はい……おっと、思わず話し込んでしまいました。」

「そうだな……悪かったな、時間とって。」

「いえ、これですこしは私に関してわかっていただけたと思うので私としては有意義な時間でしたよ、今度またみなさんでアルカンシェルに来てください。しっかりおもてなししますよ？」

「はは、それは楽しみだな～、イリアさんやリーシャちゃんにも会える、なおかつ今日知り合った美少女のリリスちゃんにも会えるなんて絶対行くしかねえな。」

「美少女って／／／」

「あぁ悪いリリス、ランディはこういうやつだから。」

「そうだね、いつか刺されないように気を付けたほうがいいよ？」

「おいワジ、それは俺じゃなくてロイドだろ？」

「フフ、それもそうか。」

「おいおい、何のことだよ？」

なるほど、かなり鈍感とは思っていましたが本当のようですね……

「「「はぁ……」」」

「なんで溜息をつくんだよ！てかリリスも！？」

「ふふ、ごめんなさい。
では私はそろそろ用事を済ませたいのでお暇させていただきますね。
」

「あぁ、時間とらせて悪かったな。」

「いえ、ではみなさんまた。」

「またな。」

「また会いに行くぜ、リリスちゃん。」

「また会おう。」

ほんとに賑やかな人達ですね……ついに知られちゃいましたか、

私の秘密。
でも……あのことに比べたらこの程度のことなんてどうでもいいこと……ですね。

「いつかは知られてしまうのでしょうね、そうなったら私は……彼らの元に……姉さんの傍にいられるのでしょうか……。」

はぁ……今考えても仕方ないですね……

「今はこの生活を守ることだけを考えましょう、それが今私にできる唯一のことです、そうですよね？。」

このリリスの問いかけは誰に対するものなのだろうか。
だが微かにリリスの首元にかけてあるルシフェリオンが赤く輝いたのだった。

リリス　side　end

16話「明かされる過去」

リリス　side

いけません、思った以上に遅くなってしまいました。
セシルさんたちが帰ってからだいぶ経ちますね、姉さん怒ってるでしょうか……

「えっと……ただいま帰りました……姉さん……」

恐る恐る私は声をかけます。

「……遅かったじゃない、リリス。」

「……怒ってますか？姉さん……」

「……別に怒ってないわよ？リリスの帰りが遅すぎるとか言って怒ってないから安心していいわ……」

……怒ってますよね？完全に……

「えっと……ごめんなさい姉さん、なんでも言うこと聞くので許してください。」

「……ほんとになんでもいいのね??」

「え……えぇ。」

今姉さんの眼がピカンと光った気がします。
……あれ?でもなぜか顔が真剣ですね……一体何を言われるのでしょうか……

「それじゃあねリリス、一つだけ教えてほしいの……」

「教えてほしいこと?なんでしょうか?」

結社のこと?それとも旅をしていた時のことでしょうか……

「……私の所に来る前……リリスはどこにいたの……?」

「……えっ……」

何を……言ってるんですか？姉さんは……

「私があなたを保護する前、リリスはどこで何をしていたの？」

真剣に私に問いかける姉さん、いつか聞かれるとは思ってましたがこんなにはやく聞かれるとは……

「それを聞いて……どうするつもりですか？」

「別にどうもしないわ……ただ一つだけ8年前にあなたに言えなかったことがあるのよ。」

「私に……言えなかったこと？」

なんでしょうか、思い当たることがないです……

「えぇ、あなたに言えなかったこと……それはね。」

ふざける空気ではないですね……でも、一体……

「リリスはいつまで……一人で背負うの？」

「っ！？」

「リリスがどんなものを背負ってるのか私は知らない、でもね……あなたが一人で抱え込んでいるのを見るのはもう嫌なのよ！」

「……あ……」

「私は……リリスが大好きよ？たとえ血がつながっていなくても……私のたった一人の……可愛い妹なのよ？」

「あ……ぁ……」

「8年前私は後悔したわ、私がリリスのことをもっとしっかり見れていればリリスはいなくならなかったのかもしれないって……」

「ち……ちが……」

ダメです、声が出ないですよ……

「ねぇリリス……もう一度言うわ、私はあなたが大好き……あ

なたの苦しみを分かち合ってあげたい……」

「ねえ……さん……」

「無理に話してくれ……とは言わないわ、リリスの心の整理がついたときに話してくれれば……私はそれでいいから。」

姉さんはやさしすぎますよ、こんな私のためにそこまでしなくても……

「ほんとに……姉さんには敵わないですよ……」

「リリス……」

「お話しします……私のことを……でもその前に……」

「どうしたの……リリス。」

「盗み聞きとは感心しないですよ?……リーシャ。」

「えっ?」

やっぱり驚いていますね、いつもの姉さんならわかったとは思いますけど、今日は仕方ないですか……

「……ごめんなさい……その……」

リーシャがとても暗い表情をしていますね。

「リーシャ……あなた……帰ったんじゃ……」

「すみませんイリアさん、忘れ物をしてしまって……それで……入ろうとしたら……話し声が聞こえて。」

「そうだったの……」

たしかにあんな話をしていたら聞いてしまいますか……

「リーシャも……私の話しを聞きたいですか？」

「……リリスはいいの？イリアさんも……」

「私は……構いません、姉さんはどうですか？」

「リリスがいいというなら私も構わないわ。」

「わかりました……リーシャも聞いていってください。
お二人だからこそ……私も話してもいいと思ったのかもしれません。
」

これは私の正直な気持ちです……でも……不安です。
私はこの二人に……大好きな二人に拒絶されてしまいそうで……

「リリス、私はずっとあなたの傍にいるわ、これだけは忘れないでね。」

「姉さん……」

「私もだよ？リリス、ずっと……あなたを見守っていくって約束したから。」

「リーシャ……」

私は……幸せものですね……こんな素敵な人達に知り合うことができたのですから。

「わかりました……それではお話ししますね……」

「えぇ。」

「……」

さてまずはなにを話しましょうかね……

「まず最初に……リリスという私の名前は……私がつけたものです。」

「どういうこと……？」

姉さんが聞いてきます。

「私に名前はありませんでした……いえ、一つだけ……ずっと呼ばれていた名前はありましたね。」

「ずっと……呼ばれていた名前……」

リーシャも聞いてきます。

「はい……被検体１５７番……これが……私の呼ばれていた名です。」

リリス　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

１６話「明かされる過去」（後書き）

あと１話か２話で２章に入ります。

17話「過去の秘密、そして星光の殲滅者」

「被険体157番、これが私がずっと呼ばれていた名前です。」

リリスの口から聞かされた過去の自分の名前、しかしそれはとても人の名前と呼べるものではなかった。

「「っ！？」」

衝撃の発言にイリアとリーシャは驚く、同時に二人の脳内には考えたくない、けれどもそう思わずにはいられないものが思い浮かんだ。

「きっと……二人の考えてる通りですよ。」

「そ……そんな……」

「……」

イリアは信じたくなかった、だがイリアの頭に浮かんだのは自分がリリスを保護した時のことだ。
リリスは表に出るような服ではなくなぜそんなものをと思ってしまうほどボロボロな服を着ていた。

よく見てみればよく病院で患者が来ているような服にそっくりだったようでもある。
その時の事を思い出し、考えたくないことが現実味を増してきたのだ。

片やリーシャは表情を崩さずあまり驚いてないかのように見える。
しかしそれは嘘である、ただ言葉が出ないのだ。
もし自分の考えていることが真実ならばリリスの過去は自分が想像した以上に残酷なものになる。
その真実を聞きたくない自分と、リリスを見守ると誓った自分が相反する。

「D．G教団を……知っていますね……？」

「え……えぇ、少し前にキーアちゃんを攫おうとした連中のことよね？弟君達が街中を逃げてるのを私とリーシャは見たもの。」

「はい、たしか警備隊の人達が薬物で操られていたとも聞きました。」

D．G教団幹部司祭のヨアヒムが起こした事件である。
彼が作り出した薬物≪グノーシス≫を使い、警備隊を操りキーアを攫おうとしたのだ。
しかし、特務支援課と遊撃士によりヨアヒムは倒され事件は解決した。

これが今に語られる教団事件である。

「はい、その事件のことは私も知ってますのでおそらく間違いないでしょう。」

リリスも教団事件のことはすでに調べていた。
クロスベルで起こった出来事はたいていリリスは調べている。
それが教団のこととなるとなおさらだ、警察が解決しなければ自分が赴くと考えていたのだから。

「私は……」

リリスは一呼吸置き

「私は……姉さんに拾われる前……D．G教団にいたんです……」

「「……」」

二人の考えが現実になった、リリスの言葉によって。

「……そこで私に行われていた、彼らでいう儀式は二つ……」

「二つ……」

イリアとリーシャのどちらが言葉を発したかはわからない。

「一つは他の子供たちとあまり変わらない……多くの薬による薬物投与。」

薬物投与だけでも充分に下種な行為、だがもう一つあるとリリスは言った。
重たい空気の中、リリスが続きを話す。

「もう一つは……これはおそらく公にはされていないことです、警察でも遊撃士でもおそらく知っているものはいないでしょう。」

そうなのだ、それに関する資料はリリスがすべて逃げるときに処分した。
だから知っているものは誰もいない、すでに調べてあることが警察と遊撃士にとっての真実なのである。

「もう一つは……別の人格の植えつけです……」

「なっ！？そんなことができるわけ……」

イリアがそんなもの信じられないとばかりにつぶやく。

「はい、常識的に考えてそんなことできるとは思いません、無理矢理に人格を壊すというなら可能ですが。」

「……なら……その儀式は失敗……ということ？」

リーシャが言う。

「……いえ、成功しています。」

「え……まさか！？」

イリアが何かに気づいたように言葉に出した。

「姉さんは……気づいたようですね……」

「そん……な……そんなことって……」

イリアの目から涙が流れる、自分の考えた最悪の予想がリリスに肯定されたからだ。

「……」

リーシャはまだ気づいていなかった、そこでリリスが話しを再開する。

「私への人格の植え付けは成功しました……ふふ、本来の私はこんなに大人しい口調と性格ではありません。
目上の人にも礼儀を弁えず、口調もひどかったのですよ。」

リリスは昔を思い出してすこし自嘲気味に話す。

「そ……それじゃ……今のリリスは……」

リーシャもついに気づいた。

「はい、今の私は本来の私ではない、作られた人格ということです。
」

「あ……」

リーシャは何も言えなくなってしまった、目の前の自分と年の変わらない少女が作られた存在だというのだから。

「ここで……私のリリスという名前にたどり着くんです。」

「……聞かせて……くれる？」

イリアは声が上手く出てないながらもリリスに聞く。

「はい、私はその儀式のあと……何度も何度も……とてつもない破壊衝動に襲われました。
なんでもいい……なにかをとてつもなく壊したくなったんです、人でも物でもあらゆるものすべてを……」

リリスはその瞬間服を脱ぎだした。
イリアとリーシャは若干顔を赤くするがすぐにその顔は驚愕に染まる。

「そこで私は自分の破壊衝動を抑えるために……自分を傷つけることにしたんです。」

リリスの胸の下から背中まで数えきれないほどの切り傷がある、おそらく果物ナイフのようなもので切り付けたのであろう。

「姉さん……私は昔一緒にお風呂に入ることを何度も拒みましたね、そして入るときはいつもタオルを巻いていた……この傷を見せたくなかったから。」

「っ……」

イリアは昔何度もリリスをお風呂に一緒に入ろうと誘った、頑なに拒むものだから単なる照れ隠しだとずっと思っていた。
だがリリスが時折苦しい表情を浮かべていたのを思い出した、イリアは後悔の念に駆られる。

「この傷を作り衝動を抑える……でも……まだ１０にも満たない子供がこれを耐えられると思いますか？」

耐えられるわけがない、イリアとリーシャはすぐにそう思った。

「耐えられませんでした、でも私はずっと我慢した……だけどその時教団の人が私に言ったんです。『今お前が最も親しくしているものを殺せ、そうすればお前をここから出してやる』と。」

「っく！そんなこと……リリス？」

イリアが声を上げようとしたが止まる、なぜならリリスの目から涙が流れていたのだ、なにかを思い出したように。

「私はその言葉を聞いた瞬間頭が真っ白になりました、そして私はその親友を殺したんです。
でも……その時でした、自分がボロボロになりながらその親友……≪リリス≫はずっと私に声をかけていた。」

「「っ！？」」

「あなたが一番苦しんでるのは知ってる、私はあなたのことが大好きだから。」

「だからあなたに受け取ってほしいの、私の名前を。
もう殺されてしまったからいないけど、家族がくれた私の宝物。」

「大好きなあなたに受け取ってほしいの、そしてどうか生きて。
そうすればきっとあなたを受け止めてくれる大切な存在に会えるわ。
」

リリスがリリスに送る言葉。
大切な存在を想い、自らその存在のために命を渡した少女の言葉。

「リリスが死んだあとずっと私は泣きました……でも不思議と私の破壊衝動は起きなくなったんです、もしかしたら……リリスが私を守ってくれているのかもしれません。」

イリアとリーシャ二人が知ったリリスの名前の秘密。
同時に思った、もう一人のリリスという少女のことを。

「そして私はリリスの名をその身に宿して決意したんです、教団から逃げることを……しかし私は戦いなんてしたことありません、逃げ出そうとしてもすぐ捕まってしまう。
その時です、私の中に……植えつけれた人格の戦いの記憶が流れ込んできたのが。」

「戦いの……記憶？」

「はい、それもそうでしょう。
私はその人格の人物そのものと言っても過言ではないのですから。」

「……」

「そして私はその記憶をもとに……私がいた教団のロッジを破壊しました。」

イリアとリーシャは驚く、戦いの記憶というものが流れ込んできたとしても9歳の少女がそんなことできるわけがない、そう思った。

「ふふ、やはり信じられない話しですよね……ルシフェリオン。」

リリスが首元にかけられた赤い球体、ルシフェリオンの名を呼んだ。その瞬間赤い光に包まれ姿を現したのは魔道杖のようなものだったのだ。

「それは……杖なのかしら……リ……リリス？」

イリアはリリスの首にかけられた赤い球体が形を変えたのに驚いたが、なによりリリスの顔を見た瞬間言葉を失った。

今のリリスは髪の毛が黒から濃い栗色へと変わり、真紅の瞳は陰りのない蒼色へとなっていた。
しかし二人はなによりリリスの目に恐れた、まるで何にも興味を示さない冷酷な瞳に見えたのだ。

「これが……私のその時の姿であり流れ込んできた記憶の持ち主……」

リリスはまるで表情を変えずその蒼色の目で二人を写しながら言う。

「≪星光の殲滅者≫です。」

１７話「過去の秘密、そして星光の殲滅者」（後書き）

やっとルシフェリオンの装備出せた～

なぜ星光の殲滅者の技が使えるかをこういう形でしてみました。

タグ欄にほんのすこしなのは入るかもってのはこれですね。

なのはのキャラが入ってくることはありません。

あくまでリリスが星の記憶を持っているというのと技が使えるということだけです。あと１話で２章入ります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6530x/

碧の軌跡～つながる姉妹の絆～

2011年11月6日02時04分発行